

大阪感染症情報解析委員会 「今週のトピックス」

毎週火曜日に、その前の1週間に府内保健所に報告があった全数把握感染症および、小児科定点把握疾患と眼科定点疾患の数を集計し、水曜日に開催される大阪感染症情報解析委員会において府内における感染症の流行状況を検討し、「今週のトピックス」を決定している。この情報は、大阪府感染症情報センターのホームページ (<http://iph.pref.osaka.jp>) を通じて広く府民に還元した。

2020年 小児科・眼科定点把握感染症の報告数上位5疾患とトピックス

週	1位	2位	3位	4位	5位	TOPICS
1	感染性胃腸炎 1.60	A群溶連菌咽頭炎 0.41	RSウイルス感染症 0.21	水痘 0.20	伝染性紅斑 0.10	インフルエンザ 注意レベル超え続く
2	感染性胃腸炎 5.72	A群溶連菌咽頭炎 2.11	水痘 0.54	伝染性紅斑 0.52	RSウイルス感染症 0.49	
3	感染性胃腸炎 4.60	A群溶連菌咽頭炎 2.11	RSウイルス感染症 0.46	伝染性紅斑 0.42	水痘 0.29	インフルエンザ 今後の動向に注意
4	感染性胃腸炎 5.59	A群溶連菌咽頭炎 2.66	RSウイルス感染症 0.47	伝染性紅斑 0.34	水痘 0.33	インフルエンザ 再び増加
5	感染性胃腸炎 5.74	A群溶連菌咽頭炎 3.16	RSウイルス感染症 0.49	咽頭結膜熱 0.41	水痘/伝染性紅斑 0.31	インフルエンザ 減少するも注意報超え続く
6	感染性胃腸炎 4.79	A群溶連菌咽頭炎 2.75	咽頭結膜熱 0.46	水痘 0.36	RSウイルス感染症 0.35	インフルエンザ 減少が続くもまだ注意が必要
7	感染性胃腸炎 4.47	A群溶連菌咽頭炎 2.44	RSウイルス感染症 0.44	咽頭結膜熱 0.35	突発性発しん 0.24	インフルエンザ 今後の動向に注意
8	感染性胃腸炎 5.05	A群溶連菌咽頭炎 2.73	RSウイルス感染症 0.40	咽頭結膜熱 0.35	水痘 0.33	インフルエンザ 減少するも注意報超え続く
9	感染性胃腸炎 3.54	A群溶連菌咽頭炎 2.10	RSウイルス感染症 0.33	水痘 0.31	咽頭結膜熱 0.28	インフルエンザ 減少傾向続く
10	感染性胃腸炎 3.02	A群溶連菌咽頭炎 2.19	RSウイルス感染症 0.40	咽頭結膜熱 0.30	水痘 0.29	インフルエンザ 減少続くも昨年同時期より高い
11	感染性胃腸炎 2.53	A群溶連菌咽頭炎 1.88	咽頭結膜熱 0.27	水痘 0.26	RSウイルス感染症 0.23	小児科・眼科定点疾患の報告数 減少傾向
12	感染性胃腸炎 1.82	A群溶連菌咽頭炎 1.20	突発性発しん 0.26	咽頭結膜熱 0.24	RSウイルス感染症 0.22	小児科・眼科定点疾患の報告数 更に減少
13	感染性胃腸炎 1.98	A群溶連菌咽頭炎 1.29	突発性発しん 0.36	流行性角結膜炎 0.27	水痘 0.19	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年同時期に比べ少ない
14	感染性胃腸炎 1.65	A群溶連菌咽頭炎 1.16	突発性発しん 0.27	流行性角結膜炎/ RSウイルス感染症/水痘 0.17	水痘 0.17	インフルエンザ 非流行期に
15	感染性胃腸炎 1.48	A群溶連菌咽頭炎 0.83	突発性発しん 0.30	RSウイルス感染症 0.14	水痘 0.13	小児科・眼科定点疾患の報告数 減少続く
16	感染性胃腸炎 1.24	A群溶連菌咽頭炎 0.55	突発性発しん 0.31	RSウイルス感染症/水痘 0.14	水痘 0.14	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
17	感染性胃腸炎 1.14	A群溶連菌咽頭炎 0.42	突発性発しん 0.29	流行性角結膜炎 0.13	咽頭結膜熱 0.08	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
18	感染性胃腸炎 1.06	A群溶連菌咽頭炎 0.41	突発性発しん 0.24	水痘 0.10	流行性目下腺炎/流行性角結膜炎 0.08	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
19	感染性胃腸炎 0.63	A群溶連菌咽頭炎 0.31	突発性発しん 0.23	水痘 0.08	流行性角結膜炎 0.06	
20	感染性胃腸炎 0.96	A群溶連菌咽頭炎 突発性発しん 0.36	水痘 0.09	手足口病 0.07	0.07	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
21	感染性胃腸炎 1.20	突発性発しん 0.34	A群溶連菌咽頭炎 0.27	水痘/ 流行性目下腺炎 0.07	0.07	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
22	感染性胃腸炎 1.19	突発性発しん 0.38	A群溶連菌咽頭炎 0.34	手足口病 0.12	流行性角結膜炎 0.12	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
23	感染性胃腸炎 1.49	突発性発しん 0.47	A群溶連菌咽頭炎 0.37	水痘 0.10	手足口病 0.08	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
24	感染性胃腸炎 1.67	突発性発しん 0.61	A群溶連菌咽頭炎 0.48	流行性角結膜炎 0.1	手足口病 0.09	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
25	感染性胃腸炎 1.92	突発性発しん 0.55	A群溶連菌咽頭炎 0.42	手足口病 0.13	流行性角結膜炎 0.08	小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少
26	感染性胃腸炎 2.08	A群溶連菌咽頭炎 0.60	突発性発しん 0.53	流行性角結膜炎/ 咽頭結膜熱/手足口病 0.08	0.08	感染性胃腸炎 4週連続して増加
27	感染性胃腸炎 2.08	A群溶連菌咽頭炎 0.63	突発性発しん 0.53	流行性角結膜炎 0.17	咽頭結膜熱 0.15	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱 増加
28	感染性胃腸炎 2.09	A群溶連菌咽頭炎 0.67	突発性発しん 0.55	咽頭結膜熱 0.13	ヘルパンギーナ 0.11	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、増加続く
29	感染性胃腸炎 2.13	A群溶連菌咽頭炎 0.62	突発性発しん 0.57	ヘルパンギーナ 0.16	咽頭結膜熱 0.15	ヘルパンギーナ・咽頭結膜熱 増加
30	感染性胃腸炎 1.60	突発性発しん 0.46	A群溶連菌咽頭炎 0.39	咽頭結膜熱 0.15	ヘルパンギーナ 0.15	夏型感染症（咽頭結膜熱、ヘルパンギーナ） 今後の動向に注意
31	感染性胃腸炎 1.98	突発性発しん 0.58	A群溶連菌咽頭炎 0.53	咽頭結膜熱 0.27	ヘルパンギーナ 0.20	夏型感染症（咽頭結膜熱、ヘルパンギーナ） 増加続く
32	感染性胃腸炎 1.55	突発性発しん 0.42	A群溶連菌咽頭炎 0.36	ヘルパンギーナ 0.22	咽頭結膜熱 0.14	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱減少、ヘルパンギーナは増加
33	感染性胃腸炎 0.85	突発性発しん 0.33	A群溶連菌咽頭炎 0.27	咽頭結膜熱 0.22	ヘルパンギーナ 0.15	咽頭結膜熱 再び増加
34	感染性胃腸炎 1.87	突発性発しん 0.47	A群溶連菌咽頭炎 0.39	咽頭結膜熱 0.29	ヘルパンギーナ 0.23	感染性胃腸炎、咽頭結膜熱、増加
35	感染性胃腸炎 1.95	突発性発しん 0.48	ヘルパンギーナ 0.41	A群溶連菌咽頭炎 0.38	流行性角結膜炎 0.25	ヘルパンギーナ 増加
36	感染性胃腸炎 1.94	突発性発しん 0.59	A群溶連菌咽頭炎 0.41	ヘルパンギーナ 0.32	咽頭結膜熱 0.28	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱 増加
37	感染性胃腸炎 2.12	A群溶連菌咽頭炎 0.58	突発性発しん 0.48	ヘルパンギーナ 0.47	咽頭結膜熱 0.33	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ 増加
38	感染性胃腸炎 1.92	A群溶連菌咽頭炎 0.58	ヘルパンギーナ 0.46	突発性発しん 0.43	咽頭結膜熱 0.24	咽頭結膜熱 減少
39	感染性胃腸炎 1.61	A群溶連菌咽頭炎 0.37	突発性発しん 0.34	ヘルパンギーナ 0.31	咽頭結膜熱 0.22	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 減少
40	感染性胃腸炎 1.76	ヘルパンギーナ 0.48	A群溶連菌咽頭炎 0.45	突発性発しん 0.40	咽頭結膜熱 0.21	ヘルパンギーナ 増加
41	感染性胃腸炎 1.78	A群溶連菌咽頭炎 0.45	突発性発しん 0.42	ヘルパンギーナ 0.38	流行性角結膜炎 0.17	インフルエンザ 例年同時期に比べ少ない
42	感染性胃腸炎 1.80	A群溶連菌咽頭炎 0.51	ヘルパンギーナ 0.48	突発性発しん 0.37	咽頭結膜熱/ 流行性角結膜炎 0.17	ヘルパンギーナ 増加
43	感染性胃腸炎 1.89	A群溶連菌咽頭炎 0.58	ヘルパンギーナ 0.49	突発性発しん 0.45	咽頭結膜熱 0.19	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
44	感染性胃腸炎 1.81	A群溶連菌咽頭炎 0.56	突発性発しん 0.36	ヘルパンギーナ 0.36	咽頭結膜熱 0.20	ヘルパンギーナ 減少
45	感染性胃腸炎 1.86	A群溶連菌咽頭炎 0.60	突発性発しん 0.31	ヘルパンギーナ 0.36	咽頭結膜熱 0.18	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
46	感染性胃腸炎 1.98	A群溶連菌咽頭炎 0.54	突発性発しん 0.39	ヘルパンギーナ 0.30	水痘/咽頭結膜熱 0.23	水痘 増加
47	感染性胃腸炎 2.26	A群溶連菌咽頭炎 0.66	突発性発しん 0.40	ヘルパンギーナ 0.28	水痘 0.26	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
48	感染性胃腸炎 2.28	A群溶連菌咽頭炎 0.54	突発性発しん 0.34	水痘 0.27	咽頭結膜熱 0.22	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 減少
49	感染性胃腸炎 2.24	A群溶連菌咽頭炎 0.72	水痘 0.35	突発性発しん 0.33	咽頭結膜熱 0.25	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
50	感染性胃腸炎 2.28	A群溶連菌咽頭炎 0.72	突発性発しん 0.38	水痘 0.31	咽頭結膜熱 0.25	水痘 減少
51	感染性胃腸炎 2.38	A群溶連菌咽頭炎 0.61	突発性発しん 0.32	咽頭結膜熱 0.30	水痘 0.23	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 減少
52	感染性胃腸炎 2.76	A群溶連菌咽頭炎 0.60	咽頭結膜熱 0.26	突発性発しん 0.26	水痘 0.19	感染性胃腸炎 増加
53	感染性胃腸炎 1.09	A群溶連菌咽頭炎 0.22	突発性発しん 0.12	水痘 0.12	咽頭結膜熱 0.07	インフルエンザ 昨年同時期に比べ激減

注1: 遅延データは含まれていません。

注2: A群溶血性レンサ球菌咽頭炎はA群溶連菌咽頭炎と表示しています。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第1週 (12月30日～1月5日) ～2020年 第2週 (1月6日～1月12日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 注意報レベル超え続く」

2020年第1週と第2週を合わせて報告する。第1週は年末年始休暇による診療実日数の減少を考慮する必要がある。第1週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は529例であり、前週比81.5%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.60、0.41、0.21、0.20、0.10であった。

第2週の報告数の総計は2,043例であり、前週比286.2%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘、伝染性紅斑、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.72、2.11、0.54、0.52、0.49であった。

インフルエンザは第1週が37%減の3,348例、定点あたり報告数は11.16であった。第2週は70%増の5,685例で、定点あたり報告数は18.89となった。大阪府西部38.29、大阪府北部27.90、南河内22.75、泉州20.06、堺市18.45である。全ブロックで注意報レベルである10を超えた。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第2週1月6日～1月12日)

第2週の順位	第1週の順位	感染症	2020年 第2週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第2週の 定点あたり 報告数	2020年第2週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.72	257%増	7.15	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.11	412%増	1.83	6歳_15%
3	4	水痘	0.54	168%増	0.57	5歳_14%
4	5	伝染性紅斑	0.52	442%増	0.56	6歳_22%
5	3	RSウイルス感染症	0.49	129%増	0.59	1歳未満_54%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	18.89	70%増	36.81	20歳以上_31%

第2週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2019年の梅毒報告数は1000例を超えたが、2018年を下回っている

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2019年の報告数は、1000例を超えたが、前年を下回った。感染症法が施行された1999年以降、2018年は最も多い報告数であった。梅毒は、性行為・オラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[梅毒とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第2週1月6日～1月12日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3類感染症	腸チフス	1					1			1
4類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)	6	1	1				1	3	9
5類感染症	アメーバ赤痢	1	1							1
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1							4
	耐産型溶血性レンサ球菌感染症	1		1						3
	後天性免疫不全症候群	2							2	2
	慢性的インフルエンザ菌感染症	3						2	1	7
	慢性的肺炎球菌感染症	3		1					1	5
	梅毒	9	1		1				7	10
百日咳	1								3	
結核 (2019年11月分)	結核 新登録患者数: 102名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 31名)									
		(府内累積報告数 1,130名、内 肺・喀痰塗抹陽性 434名)								

(2020年1月14日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第3週 (1月13日～1月19日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 今後の動向に注意」

第3週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は1,672例であり、前週比18.2%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.60、2.11、0.46、0.42、0.29であった。

感染性胃腸炎は前週比20%減の906例で、大阪府西部7.22、南河内6.75、中河内5.80、大阪府北部5.64、北河内4.56である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は増減なしの415例で、南河内3.81、堺市3.11、北河内2.70であった。RSウイルス感染症は5%減の91例で、大阪府北部1.00、北河内0.67、南河内・大阪府西部0.56である。伝染性紅斑は20%減の82例で、南河内1.25、泉州・大阪府北部・大阪府南部0.50であった。水痘は46%減の58例で、大阪府北部1.00、三島0.47、豊能0.41である。

インフルエンザは2%減の5,569例で、定点あたり報告数は18.56であった。大阪府西部34.86、南河内27.00、大阪府北部26.75、北河内18.79、泉州18.42である。全ブロックで注意報レベルである10を超えている。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第3週1月13日～1月19日)

第3週の順位	第2週の順位	感染症	2020年 第3週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第3週の 定点あたり 報告数	2020年第3週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	4.60	20%減	6.82	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.11	0%増	1.91	6歳_14%
3	5	RSウイルス感染症	0.46	5%減	0.62	1歳_36%
4	4	伝染性紅斑	0.42	20%減	0.57	5歳_24%
5	3	水痘	0.29	46%減	0.27	10-14歳_16%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	18.56	2%減	46.09	20歳以上_21%

第3週のコメント

～バンコマイシン耐性腸球菌感染症～ 2019年の報告数は、大阪府が全国で第一位である

全数把握感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) は、バンコマイシンに耐性を獲得した腸球菌である。術後患者や感染防御機能の低下した患者では腹膜炎、術創感染症、肺炎、敗血症などの感染症を引き起こす場合があるため、集中治療室や外科治療ユニットなど易感染者を治療する部門で問題となっており、臨床的、疫学的に重要な薬剤耐性菌である。VREによる術創感染症や腹膜炎などの治療は、抗菌薬の投与とともに感染巣の洗浄やドレナージなどを適宜組み合わせる。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[バンコマイシン耐性腸球菌感染症\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第3週1月13日～1月19日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1							1	2
4類感染症	デング熱	1		1						2
	マラリア	1							1	1
5類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)	1					1			10
	ウイルス性肝炎 (B型)	1						1		1
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	1	1	1			1		8
	急性胆炎	1	1							4
	耐産型溶血性レンサ球菌感染症	1								1
	慢性的肺炎球菌感染症	4		1			2			1
	梅毒	14	2				2		10	34
バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1			1					1	
百日咳	4	1							3	
結核 (2019年11月分)	結核 新登録患者数: 102名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 31名)									
		(府内累積報告数 1,130名、内 肺・喀痰塗抹陽性 434名)								

(2020年1月21日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第4週 (1月20日～1月26日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 再び増加」

第4週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,021例であり、前週比20.9%増であった。報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.59、2.66、0.47、0.34、0.33である。感染性胃腸炎は前週比22%増の1,102例で、南河内8.94、大阪府西部8.22、中河内6.90、北河内6.89、三島5.94であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は26%増の524例で、大阪府西部・大阪府南部4.22、北河内3.78、堺市3.53、南河内3.44である。
RSウイルス感染症は2%増の93例で、大阪府北部1.29、大阪府西部1.22、中河内0.55、大阪府南部0.50、堺市0.47であった。
伝染性紅斑は18%減の67例で、南河内1.00、中河内0.50、泉州0.40である。
水痘は12%増の65例で、大阪府北部1.43、大阪府東部0.60、中河内0.40であった。

インフルエンザは14%増の6,358例で定点あたり報告数は21.19である。定点あたり報告数の上位は大阪府西部30.43、南河内30.38、中河内22.60、泉州22.00、北河内21.88で、府内11ブロック中9ブロックで定点あたり報告数が増加した。大阪府西部、南河内では、警報レベル基準値30を超えた。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第4週1月20日～1月26日)

第4週 の順位	第3週 の順位	感染症	2020年 第4週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第4週の 定点あたり 報告数	2020年第4週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.59	22%増	7.49	1歳_19%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.66	26%増	2.25	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.47	2%増	0.67	1歳未満_38%
4	4	伝染性紅斑	0.34	18%減	0.53	4歳_22%
5	5	水痘	0.33	12%増	0.34	4歳_10-14歳_17%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	21.19	14%増	47.99	10-14歳_21%

第4週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～ 大阪府では、2019年に、7例の報告があった。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌 (*Neisseria meningitidis*) による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜炎症候群、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群 (DIC) を呈する。髄膜炎ベルト (meningitis belt) とよばれるアフリカ中部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セフェム系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌 (血清型A、C、Y、W-135) ワクチンの任意接種が開始された

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[侵襲性髄膜炎菌感染症とは \(国立感染症研究所\)](#)

表 2. 大阪府全数報告数 (2020年 第4週1月20日～1月26日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積
3 類感染症	3						2		1	5
4 類感染症	1								1	2
	1	1								12
5 類感染症	1								1	2
	2		1						1	11
	3					1	1	1	1	9
	2				1					6
	1								1	4
	2			1						9
	1								1	1
	3	1				1	1			16
	11	1					1	1		8
	5		1						1	3
10日限										
結核	結核 新登録患者数: 102名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 31名)									
(2019年11月分)	(府内累積報告数 1,130名、内 肺・喀痰塗抹陽性 434名)									
	(2020年1月28日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第5週 (1月27日～2月2日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少するも注意報超え続く」

第5週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,155例であり、前週比6.6%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、伝染性紅斑、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.74、3.16、0.49、0.41、0.31、0.31であった。感染性胃腸炎は前週比3%増の1,131例で、南河内8.94、中河内7.05、泉州6.60、大阪府北部6.43、三島5.82であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比19%増の623例で、南河内4.75、堺市4.74、北河内4.33であった。
RSウイルス感染症は前週比4%増の97例で、大阪府西部1.00、泉州0.85、南河内0.75である。
咽頭結膜熱は前週比29%増の81例で、三島0.71、中河内0.55、大阪府南部0.50であった。
伝染性紅斑は前週比7%減の62例で、南河内0.88、大阪府東部0.67、泉州0.40である。
水痘は前週比5%減の62例で、大阪府西部1.00、三島0.53、大阪府北部0.50であった。

インフルエンザは20%減の5,065例で、定点あたり報告数は16.88であった。大阪府西部25.29、南河内22.13、中河内19.40、泉州18.61、北河内17.95である。府内全域で注意報レベルの10を超えている。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第5週1月27日～2月2日)

第5週 の順位	第4週 の順位	感染症	2020年 第5週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第5週の 定点あたり 報告数	2020年第5週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.74	3%増	7.20	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.16	19%増	2.25	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.49	4%増	0.58	1歳未満_36%
4	4	咽頭結膜熱	0.41	29%増	0.33	1歳_23%
5	5	伝染性紅斑	0.31	5%減	0.48	5歳_19%
5	5	水痘	0.31	7%減	0.31	7歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	16.88	20%減	34.63	10-14歳_20%

第5週のコメント

～侵襲性肺炎球菌感染症～ 大阪府では毎年250例以上の報告があります

全数把握感染症

侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、感染症学上、肺炎球菌 (*Streptococcus pneumoniae*) による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。髄膜炎、敗血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗菌薬が有効であるが、近年薬剤耐性も多くなる報告されている。侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[侵襲性肺炎球菌感染症とは \(国立感染症研究所\)](#)

表 2. 大阪府全数報告数 (2020年 第5週1月27日～2月2日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積
3 類感染症	1								1	1
	2								2	7
4 類感染症	1			1						1
	1						1			14
5 類感染症	2								1	16
	1					1				8
	3				1	1				22
	6			1						8
	1			1						4
	3	1								2
10日限										
結核	結核 新登録患者数: 145名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 52名)									
(2019年12月分)	(府内累積報告数 1,636名、内 肺・喀痰塗抹陽性 638名)									
	(2020年2月4日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第6週 (2月3日～2月9日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少が概くもまだ注意が必要」

第6週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は1,859例であり、前週比13.7%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.79、2.75、0.46、0.36、0.35である。感染性胃腸炎は前週比17%増の943例で、南河内7.75、大阪市北部6.36、北河内6.19、泉州4.75、堺市4.26、豊能4.23であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比13%減の542例で、堺市4.16、北河内3.70、南河内3.63、泉州3.50、大阪市西部2.89である。咽頭結膜熱は前週比12%増の91例で、泉州0.85、中河内0.75、北河内0.59であった。水痘は前週比13%増の70例で、大阪市北部1.21、大阪市東部0.53、中河内・泉州共に0.45である。RSウイルス感染症は前週比30%減の68例で、南河内0.63、大阪市北部0.57、中河内0.55であった。

インフルエンザは33%減の3,413例で、定点あたり報告数は11.38であった。中河内17.23、南河内14.42、大阪市北部12.50、堺市12.14、泉州11.61であった。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第6週2月3日～2月9日)

第6週の順位	第5週の順位	感染症	2020年 第6週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第6週の 定点あたり 報告数	2020年第6週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	4.79	17%増	6.38	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.75	13%減	2.30	4歳_16%
3	4	咽頭結膜熱	0.46	12%増	0.43	1歳_24%
4	3	水痘	0.36	13%増	0.37	6歳_23%
5	5	RSウイルス感染症	0.35	30%減	0.68	1歳_38%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	11.38	33%減	21.04	10-14歳_22%

第6週のコメント

～ Dengue熱 ～ 海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

Dengue熱

Dengue熱は、ネッタイシマカやヒトシマカなどの蚊によって媒介されるDengueウイルスの感染症である。比較的軽症型のDengue熱と、重症型のDengue出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がDengue熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例(輸入症例)が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例より持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。2019年にも、3例の国内発生報告があった。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋内痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[Dengue熱とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第6週2月3日～2月9日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告 をご覧ください。)
新型コロナウイルス感染症は、施行された2月1日以後の集計です。

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	北河内	中河内	南河内	堺市	大阪市	泉州	府内累積報告数
4 類感染症									
E型肝炎	1					1			2
Dengue熱 (I型)	1							1	3
ブルセラ症	1							1	1
レジオネラ症 (肺炎型)	1							1	14
5 類感染症									
急性脳炎	1							1	11
慢性的インフルエンザ感染症	2							2	11
慢性的肺炎球菌感染症	1			1					26
梅毒	8	1	1					1	5
百日咳	2								2
結核 (2019年12月分)	結核 新登録患者数: 145名		(内 肺・瘰癧塗抹陽性 52名)						
			(府内累積報告数 1,636名、内 肺・瘰癧塗抹陽性 638名)						

(2020年2月11日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第7週 (2月10日～2月16日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 今後の動向に注意」

第7週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は1,672例であり、前週比10.1%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、突発性発疹の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.47、2.44、0.44、0.35、0.24である。感染性胃腸炎は前週比7%減の881例で、南河内6.06、泉州5.70、大阪市西部5.33、中河内5.10、大阪市北部4.79であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%減の481例で、南河内3.50、堺市3.47、北河内3.41である。RSウイルス感染症は26%増の86例で、泉州0.95、大阪市北部0.71、大阪市西部0.67であった。咽頭結膜熱は24%減の69例で、中河内0.55、泉州0.50、堺市0.42であった。

インフルエンザは2%増の3,486例で、定点あたり報告数は11.62であった。大阪市西部17.21、中河内15.00、北河内14.29、南河内13.25、豊能12.59、堺市12.55であった。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第7週2月10日～2月16日)

第7週の順位	第6週の順位	感染症	2020年 第7週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第7週の 定点あたり 報告数	2020年第7週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	4.47	7%減	5.92	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.44	11%減	1.78	5歳_16%
3	5	RSウイルス感染症	0.44	26%増	0.79	1歳_31%
4	3	咽頭結膜熱	0.35	24%減	0.43	1歳_29%
5	6	突発性発疹	0.24	16%減	0.30	1歳_62%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	11.62	2%増	9.28	10-14歳_25%

第7週のコメント

～レジオネラ症～ 2019年の累積報告数は、133例でした。

全数把握感染症

レジオネラ症

レジオネラ症は、レジオネラ・ニューモフィラ (*Legionella pneumophila*) を代表とするレジオネラ属による細菌感染症である。土壌や水環境に、普遍的に存在する菌である。人工環境 (噴水等の水施設、ビル屋上に立つ冷却塔、ジャグジー、加湿器等) や循環水を利用した風呂から発生したレジオネラ属菌を含むエアロゾルを吸入することで感染する。病型として肺炎型と一過性で自然に改善するポテンテック熱型がある。ヒト・ヒト感染はない。健康者も罹患するが、細胞性免疫機能が低下している。乳幼児、高齢者など、喫煙者、大酒家は重篤化する可能性が高い。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[レジオネラ症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第7週2月10日～2月16日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告 をご覧ください。)
新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定められた2月1日以後の集計です。

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	北河内	中河内	南河内	堺市	大阪市	泉州	府内累積報告数
4 類感染症									
マラリア (不期)	1		1						2
レジオネラ症 (肺炎型)	3			1				1	18
5 類感染症									
アメーバ赤痢	2						1		5
カルバハナム菌性腸内細菌科細菌感染症	1				1				12
急性脳炎	1	1							18
後天性免疫不全症候群	3							1	2
梅毒	6			1		1	1	3	116
百日咳	3							1	2
結核 (2019年12月分)	結核 新登録患者数: 145名		(内 肺・瘰癧塗抹陽性 52名)						
			(府内累積報告数 1,636名、内 肺・瘰癧塗抹陽性 638名)						

(2020年2月18日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第8週 (2月17日～2月23日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少するも注意報超え続く」

第8週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,869例であり、前週比11.8%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.05、2.73、0.40、0.35、0.33である。感染性胃腸炎は前週比13%増の995例で、泉州7.55、南河内6.69、中河内6.15、大阪市西部6.11、北河内5.26であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%増の538例で、堺市4.53、北河内3.52、泉州3.45である。RSウイルス感染症は9%減の78例で、南河内1.19、泉州0.90、大阪市西部0.78であった。
咽頭結膜熱は1%減の68例で、中河内0.65、三島0.53、泉州0.50である。
水痘は55%増の65例で、中河内0.60、大阪市北部0.57、豊能0.55であった。

インフルエンザは6%減の2,949例で、定点あたり報告数は10.98である。中河内15.47、北河内15.12、大阪市北部13.95、大阪市西部13.43、堺市12.21、南河内10.75、豊能10.41であった。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第8週2月17日～2月23日)

第8週の順位	第7週の順位	感染症	2020年第8週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第8週の定点あたり報告数	2020年第8週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.05	13%増	7.06	2歳_13%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.73	12%増	2.56	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.40	9%減	0.86	1歳_37%
4	4	咽頭結膜熱	0.35	1%減	0.38	2歳_21%
5	6	水痘	0.33	55%増	0.26	8歳_20%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	10.98	6%減	6.49	10-14歳_28%

第8週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日であり、かぜ様症状で始まる(カタル期)、百日咳特有の咳が始まる(痙攣期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗生薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

(集積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[百日咳とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第8週2月17日～2月23日)

注：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載します。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州市	大阪市	府内累計報告数
3類感染症										
	腸管出血性大腸菌感染症	1							1	9
	ウイルス性肝炎(B型)	1							1	3
5類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2							2	21
	侵袭性肺炎球菌感染症	4			1			1	2	37
	梅毒	6	1			1		1	3	129
	百日咳	6			4		1		1	45
	風しん	1							1	3
結核	結核 新登録患者数：145名 (内 肺・喉症速扶陽性 52名)									
(2019年12月分)	(府内累計報告数 1,636名、内 肺・喉症速扶陽性 638名)									
	(2020年2月25日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第9週 (2月24日～3月1日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少傾向続く」

第9週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,405例であり、前週比24.8%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.54、2.10、0.33、0.31、0.28である。感染性胃腸炎は前週比30%減の697例で、南河内6.31、大阪市西部4.67、泉州4.65、中河内3.80、北河内3.56であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は23%減の414例で、堺市2.95、北河内2.93、泉州2.80である。RSウイルス感染症は17%減の65例で、南河内1.00、大阪市西部0.78、泉州0.75であった。
水痘は5%減の62例で、大阪市北部1.36、泉州0.45、堺市0.32である。
咽頭結膜熱は19%減の55例で、泉州0.45、大阪市北部0.43、北河内・堺市0.37であった。

インフルエンザは11%減の2,941例で、定点あたり報告数は9.80であり、警戒レベル終息基準値10を下回った。しかし大阪市北部14.25、中河内12.97、大阪市西部12.86、北河内12.69、堺市11.48などの5ブロックでまだ注意報レベルを超えている。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第9週2月24日～3月1日)

第9週の順位	第8週の順位	感染症	2020年第9週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第9週の定点あたり報告数	2020年第9週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	3.54	30%減	6.60	3歳_12%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.10	23%減	2.76	4歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	0.33	17%減	0.99	1歳未満_32%
4	5	水痘	0.31	5%減	0.35	10-14歳_18%
5	4	咽頭結膜熱	0.28	19%減	0.48	1歳_25%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	9.80	11%減	4.57	10-14歳_24%

第9週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、中国を中心に世界的に広がりをみせている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日(平均5.6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状を呈し、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗いや咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

(報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第9週2月24日～3月1日)

注：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載します。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州市	大阪市	府内累計報告数
4類感染症										
	レジオネラ症(肺炎型)	1	1							19
5類感染症	アメーバ赤痢	3	1	2						8
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1							24
	侵袭性肺炎球菌感染症	2								2
	梅毒	2								2
	百日咳	4				1		1	2	52
指定感染症	新型コロナウイルス感染症									
	4									4
結核	結核 新登録患者数：145名 (内 肺・喉症速扶陽性 52名)									
(2019年12月分)	(府内累計報告数 1,636名、内 肺・喉症速扶陽性 638名)									
	(2020年3月3日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第10週 (3月2日～3月8日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少傾向も昨年同時期より高い」

第10週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は総計11,329例であり、前週比5.4%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、水痘、の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.02、2.19、0.40、0.30、0.29である。感染性胃腸炎は前週比15%減の595例で、南河内5.81、泉州4.85、中河内3.90、北河内2.96、大阪市南部2.78であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%増の432例で、泉州3.25、堺市3.05、南河内2.81である。
RSウイルス感染症は20%増の78例で、南河内1.19、泉州0.80、大阪市北部0.57であった。
咽頭結膜熱は6%増の59例で、北河内0.56、中河内0.55、三島0.47である。水痘は6%減の58例、大阪市北部0.5、北河内0.48、中河内・豊能0.45であった。

インフルエンザは25%減の1,197例で、定点あたり報告数は7.32であり、北河内11.00、中河内10.52の2ブロックでまだ注意レベルを超えている。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第10週3月2日～3月8日)

第10週 の順位	第9週 の順位	感染症	2020年 第10週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第10週の 定点あたり 報告数	2020年第10週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	3.02	15%減	7.06	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.19	4%増	2.95	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.40	20%増	1.13	1歳未満_44%
4	5	咽頭結膜熱	0.30	7%増	0.26	1歳_22%
5	4	水痘	0.29	6%減	0.37	5歳_22%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	7.32	25%減	3.18	10-14歳_22%

第10週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い・咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認され以降、中国を中心に感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHIC)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均 5.6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い・咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

(報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第10週3月2日～3月8日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「[週報]発生動向調査>全数報告」をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定められ2月1日以降の集計です。)

病名 ()内の病名は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府内 累積 報告 数
4類感染症	2	1					1			21
カルバペナム耐性菌内臓器科細菌感染症	1								1	28
クロイツフェルト・ヤコブ病	1				1					2
前症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1	14
ジアルシア症	1								1	2
5類感染症	1	1							1	13
慢性的肺炎球菌感染症	1	1								45
梅毒	6								1	159
百日咳	5			1		1				3
61	51									55
指定感染症	51									55
結核	145名	(内 肺・喉痰塗抹陽性 52名)								
(2019年12月分)		(府内累積報告数 1,636名、内 肺・喉痰塗抹陽性 638名)								

(2020年3月10日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第11週 (3月9日～3月15日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 減少傾向」

第11週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は総計11,129例であり、前週比15.0%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.53、1.88、0.27、0.26、0.23である。感染性胃腸炎は前週比16%減の498例で、南河内4.56、中河内4.15、泉州3.30、大阪市北部2.71、大阪市西部2.44であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%減の371例で、泉州2.95、南河内2.63、堺市2.26である。
咽頭結膜熱は10%減の53例で、大阪市北部0.79、中河内0.55、三島0.53であった。
水痘は12%減の51例で、大阪市北部0.43、北河内0.41、中河内・泉州0.30であった。
RSウイルス感染症は41%減の46例で、大阪市北部0.50、大阪市西部0.44、大阪市0.40であった。

インフルエンザは65%減の759例で、定点あたり報告数は2.53であった。南河内4.08、大阪市北部3.90、中河内3.50であり、全ブロックで注意レベルである10を下回った。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第11週3月9日～3月15日)

第11週 の順位	第10週 の順位	感染症	2020年 第11週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第11週の 定点あたり 報告数	2020年第11週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.53	16%減	7.06	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.88	14%減	2.69	4歳_17%
3	4	咽頭結膜熱	0.27	10%減	0.48	1歳_23%
4	5	水痘	0.26	12%減	0.36	7歳_20%
5	3	RSウイルス感染症	0.23	41%減	1.15	1歳未満_30%
5	6	突発性赤しん	0.23	4%増	0.38	1歳_49%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	2.53	65%減	1.85	6歳_16%

第11週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い・咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認され以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHIC)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均 5.6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い・咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

(報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第11週3月9日～3月15日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「[週報]発生動向調査>全数報告」をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定められ2月1日以降の集計です。)

病名 ()内の病名は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府内 累積 報告 数
4類感染症	1									4
アメーバ赤痢	2	1		1						11
カルバペナム耐性菌内臓器科細菌感染症	1	1								30
後天性免疫不全症候群	1								1	21
慢性的肺炎球菌感染症	1					1				48
水痘 (入院例)	1								1	3
梅毒	12	1		4	1	1		1	4	188
百日咳	5				1	1		1	3	71
麻疹	1								1	1
51	51									106
指定感染症	51									106
結核	138名	(内 肺・喉痰塗抹陽性 47名)								
(2020年1月分)		(府内累積報告数 138名、内 肺・喉痰塗抹陽性 47名)								

(2020年3月18日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第12週 (3月16日～3月22日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 更に減少」

第12週の定点把握感染症、眼科定点疾患の報告数の総計は前週比26.7%減の827例であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンガ球菌咽頭炎、突発性発疹、咽頭結核熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.82、1.20、0.26、0.24、0.22である。感染性胃腸炎は前週比28%減の358例で、南河内3.00、中河内2.95、泉州2.20、大阪市西部1.89、大阪府南部1.83であった。A群溶血性レンガ球菌咽頭炎は36%減の236例で、泉州2.25、南河内1.81、大阪府南部1.44である。咽頭結核熱は9%減の48例で、大阪府南部0.61、中河内0.45、堺市0.37であった。RSウイルス感染症は9%減の44例で、大阪府南部0.44、泉州0.40、南河内0.31である。インフルエンザは60%減の306例で、定点あたり報告数は1.02であった。大阪府西部3.50、北河内1.31、南河内1.29であった。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

第12週の順位	第11週の順位	感染症	2020年第12週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第12週の定点あたり報告数	2020年第12週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.82	28%減	6.15	20歳以上_16%
2	2	A群溶血性レンガ球菌咽頭炎	1.20	36%減	2.30	4歳_16%
3	6	突発性発疹	0.26	13%増	0.29	1歳_51%
4	3	咽頭結核熱	0.24	9%減	0.47	2歳_23%
5	5	RSウイルス感染症	0.22	4%減	1.24	1歳_41%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.02	60%減	1.66	20歳以上_20%

第12週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がっている。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」を、3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均5.6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	報告数
4類感染症								1	22
5類感染症	アダーバ毒菌	1		1					12
	ウイルス性肝炎 (B型)	1	1						6
	カルバヘナム耐性腸内細菌科細菌感染症	1						1	32
	慢性的インフルエンザウイルス感染症	1						1	14
	慢性的肺炎球菌感染症	1						1	49
	梅毒	9	1						8
風しん	1							1	5
指定感染症								24	133
結果	結果 新登録患者数: 138名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 47名) (2020年1月分) (府内累積報告数 138名、内 肺・喀痰塗抹陽性 47名)								(2020年3月24日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第13週 (3月23日～3月29日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年同時期に比べ少ない」

第13週の定点把握感染症、眼科定点疾患の報告数の総計は876例であり、前週比5.9%増であった。報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンガ球菌咽頭炎、突発性発疹、流行性角結膜炎、水痘順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.98、1.29、0.36、0.27、0.19である。感染性胃腸炎は前週比9%増の391例で、南河内2.75、大阪府西部2.67、三島2.29、豊能2.27、中河内2.25であった。A群溶血性レンガ球菌咽頭炎は8%増の254例で、泉州2.25、南河内2.06、三島1.47、大阪府南部1.44、堺市1.32である。流行性角結膜炎は133%増の14例で、北河内1.00、大阪府北部0.80、大阪府西部0.50、大阪府東部0.33、泉州0.17であった。水痘は7%減の38例で、北河内0.44、泉州0.30、大阪府東部0.27、南河内0.25、大阪府北部0.21である。インフルエンザは49%減の157例で定点あたり報告数は0.52であった。大阪府西部1.14、三島0.81、泉州0.79、中河内0.73、南河内0.67である。定点あたり報告数は1を下回り、非流行期に入ったと考えられる。

感染性胃腸炎

インフルエンザ

第13週の順位	第12週の順位	感染症	2020年第13週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第13週の定点あたり報告数	2020年第13週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.98	9%増	5.51	20歳以上_16%
2	2	A群溶血性レンガ球菌咽頭炎	1.29	8%増	2.15	4歳_18%
3	3	突発性発疹	0.36	39%増	0.39	1歳_54%
4	8	流行性角結膜炎	0.27	133%増	0.33	20歳以上_93%
5	6	水痘	0.19	7%減	0.31	4歳_21%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.52	49%減	1.14	4歳_18%

第13週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がっている。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」を、3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	報告数
3類感染症								2	11
4類感染症								2	24
5類感染症	カルバヘナム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1						33
	後天性免疫不全症候群	1							26
	慢性的肺炎球菌感染症	2						1	51
	梅毒	8		3	1				4
	百日咳	3				1		1	1
	百日咳	3				1		1	1
指定感染症								75	208
結果	結果 新登録患者数: 138名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 47名) (2020年1月分) (府内累積報告数 138名、内 肺・喀痰塗抹陽性 47名)								(2020年3月31日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第14週 (3月30日～4月5日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 非流行期」

第14週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は756例であり、前週比13.7%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンガ球菌咽頭炎、突発性発疹、流行性角結膜炎、RSウイルス感染症、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.65、1.16、0.27、0.17、0.17であった。
感染性胃腸炎は前週比17%減の326例で、中河内3.15、大阪市西部2.44、南河内2.31、大阪市南部2.11、泉州1.85である。
A群溶血性レンガ球菌咽頭炎は前週比10%減の228例で、泉州2.05、大阪市南部1.78、大阪市北部1.71であった。
流行性角結膜炎は前週比36%減の9例で、大阪市西部0.50、堺市-中河内0.40である。
RSウイルス感染症は前週比22%増の33例で、大阪市東部0.40、北河内0.26、南河内0.25であった。
水痘は前週比13%減の33例で、三島0.29、大阪市東部0.27、大阪市西部0.22である。

インフルエンザは41%減の92例で、定点あたり報告数は0.31であった。南河内0.96、大阪市西部0.50、泉州0.42、北河内0.36、中河内0.30である。流行期の目安となる定点あたり1.00を2週続けて下回り、非流行期入りした。

感染性胃腸炎

インフルエンザ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第14週3月30日～4月5日)

第14週 の順位	第13週 の順位	感染症	2020年 第14週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第14週の 定点あたり 報告数	2020年第14週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.65	17%減	5.33	20歳以上_19%
2	2	A群溶血性レンガ球菌咽頭炎	1.16	10%減	1.85	5歳_19%
3	3	突発性発疹	0.27	24%減	0.39	1歳_48%
4	4	流行性角結膜炎	0.17	36%減	0.37	20歳以上_89%
4	7	RSウイルス感染症	0.17	22%増	1.01	1歳未満_30%
4	5	水痘	0.17	13%減	0.29	6歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.31	41%減	0.94	20歳以上_23%

第14週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」を3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器腫瘍等の症状が見られ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗いや咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第14週3月30日～4月5日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります。
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告 をご覧ください。
新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	1	1							12
4類感染症 A型肝炎	1	1							3
4類感染症 レジオネラ症 (肺炎型)	1							1	26
4類感染症 レジオネラ症 (無症状病原体保有者)	1							1	1
5類感染症 アメーバ赤痢	1		1						15
5類感染症 後天性免疫不全症候群	1							1	31
5類感染症 梅毒	4		1					1	2
5類感染症 百日咳	3		1		2				78
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	192								406
結核	新登録患者数: 124名 (内 肺-喀痰塗抹陽性 44名)								
(2020年2月分)	(府内累積報告数 264名、内 肺-喀痰塗抹陽性 93名)								
	(2020年4月7日 集計分)								

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第15週 (4月6日～4月12日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 減少続」

第15週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は625例であり、前週比17.3%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンガ球菌咽頭炎、突発性発疹、RSウイルス感染症、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.48、0.83、0.30、0.14、0.13であった。
感染性胃腸炎は前週比11%減の291例で、中河内2.40、南河内2.31、泉州2.20、三島1.82、大阪市西部1.56である。
A群溶血性レンガ球菌咽頭炎は前週比29%減の163例で、南河内1.63、中河内1.55、泉州1.30であった。
RSウイルス感染症は前週比18%減の27例で、大阪市南部-大阪市西部0.33、中河内0.25である。
水痘は前週比21%減の26例で、北河内0.30、三島0.24、大阪市北部0.21であった。

インフルエンザは第14週に非流行期となったため、記載を省略しました。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンガ球菌咽頭炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第15週4月6日～4月12日)

第15週 の順位	第14週 の順位	感染症	2020年 第15週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第15週の 定点あたり 報告数	2020年第15週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.48	11%減	7.10	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンガ球菌咽頭炎	0.83	29%減	2.40	4歳_20%
3	3	突発性発疹	0.30	9%増	0.48	1歳_49%
4	4	RSウイルス感染症	0.14	18%減	1.18	1歳未満_41%
5	4	水痘	0.13	21%減	0.24	1歳_27%

第15週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」を3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言を発生させ、大阪府を含む7府県が対象地域に指定された。感染拡大を防止するため、3密の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められている。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器腫瘍等の症状が見られ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗いや咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第15週4月6日～4月12日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります。
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告 をご覧ください。
新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	1	1							13
4類感染症 レジオネラ症 (肺炎型)	2				1			1	28
4類感染症 カルバペネム耐性菌内臓器科細菌感染症	1							1	36
5類感染症 ジアルシア症	1		1						4
5類感染症 梅毒	2	1						1	267
5類感染症 百日咳	1							1	80
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	384								805
結核	新登録患者数: 124名 (内 肺-喀痰塗抹陽性 44名)								
(2020年2月分)	(府内累積報告数 264名、内 肺-喀痰塗抹陽性 93名)								
	(2020年4月14日 集計分)								

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第16週 (4月13日～4月19日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少」

第16週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は533例であり、前週比14.7%減であった(2019年第16週 3,166例、前年比83.2%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、RSウイルス感染症、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.24、0.55、0.31、0.14、0.14であった。

感染性胃腸炎は前週比16%減の244例で、南河内2.50、中河内2.15、泉州1.90、三島1.06、北河内・大阪市西部1.00である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比34%減の108例で、泉州1.05、南河内1.00、大阪市西部0.78であった。RSウイルス感染症は前週と変わらず27例で、大阪市南部0.67、大阪市西部0.22、中河内0.20であった。

水痘は前週比4%増の27例で、三島0.35、中河内0.25、南河内・北河内0.19である。

(突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していない。)

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第16週の順位	第15週の順位	感染症	2020年第16週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第16週の定点あたり報告数	2020年第16週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.24	16%減	8.41	2歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.55	34%減	2.86	4歳_21%
3	3	突発性発しん	0.31	2%増	0.43	1歳_62%
4	4	RSウイルス感染症	0.14	増減なし	1.31	1歳未満_37%
4	5	水痘	0.14	4%増	0.23	2歳_5歳_19%

第16週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発出され、大阪府を含む7府県を対象地域に指定された。感染拡大を防止するため、3密の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められている。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日(平均5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器症状等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗いや咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

その他のグラフはこちら↓
[感染症情報センター 新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第16週4月13日～4月19日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「(速報)発生動向調査>全数報告」をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症										
4類感染症										
5類感染症										
指定感染症										
結核 (2020年2月分)	結核 新登録患者数: 124名	(内) 肺・喀痰塗抹陽性 44名								
		(府内累積報告数 264名、内 肺・喀痰塗抹陽性 93名)								

(2020年4月21日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第17週 (4月20日～4月26日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少」

第17週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は430例であり、前週比19.3%減であった(2019年第17週 3,382例、前年比87.3%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.14、0.42、0.29、0.13、0.08であった。

感染性胃腸炎は前週比8%減の224例で、南河内1.81、中河内1.75、大阪市南部1.72、三島1.41、泉州1.40である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比23%減の83例で、泉州1.15、中河内0.70、大阪市南部0.67であった。流行性角結膜炎は前週比17%増の7例で、大阪市東部・三島0.50、北河内0.33である。

咽頭結膜熱は前週比35%減の15例で、泉州0.20、豊能0.14、南河内0.13であった。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第17週の順位	第16週の順位	感染症	2020年第17週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第17週の定点あたり報告数	2020年第17週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.14	8%減	8.62	1歳_19%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.42	23%減	2.91	3歳、4歳_14%
3	3	突発性発しん	0.29	7%減	0.64	1歳_50%
4	7	流行性角結膜炎	0.13	17%増	0.31	20歳以上_100%
5	6	咽頭結膜熱	0.08	35%減	0.75	1歳未満、1歳_33%

(突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第17週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

2020年4月7日に改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づいて出された新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言について、4月16日に対象地域が全都道府県に拡大された。感染拡大を防止するため、3密の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められている。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日(平均5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器症状等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗いや咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

その他のグラフはこちら↓
[感染症情報センター 新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第17週4月20日～4月26日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「(速報)発生動向調査>全数報告」をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
4類感染症										
5類感染症										
指定感染症										
結核 (2020年2月分)	結核 新登録患者数: 124名	(内) 肺・喀痰塗抹陽性 44名								
		(府内累積報告数 264名、内 肺・喀痰塗抹陽性 93名)								

(2020年4月28日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第18週 (4月27日～5月3日) ～2020年 第19週 (5月4日～5月10日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

〔小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少〕

第18週と第19週を合わせて報告する。行動変容や大型連休のための医療機関の診療日数の減少を考慮する必要がある。

第18週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は406例であり、前週比5.6%減であった(2019年第18週 1,041例、前年比61.0%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.06、0.41、0.24、0.10、0.08であった。

第19週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は276例であり、前週比32.0%減であった(2019年第19週 2,289例、前年比7.9%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ0.63、0.31、0.23、0.08、0.06であった。

感染性胃腸炎は前週比41%減の123例で、大阪市南部1.06、中河内1.00、大阪府西部0.89、泉州0.70、南河内0.69である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比26%減の60例で、泉州0.60、中河内0.55、大阪市北部0.50であった。水痘は前週比25%減の15例で、大阪市西部・北河内0.22、三島0.12であった。

流行性角結膜炎は前週比25%減の3例で、北河内0.50である。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

19週 の順位	18週 の順位	感染症	2020年 第19週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第19週の 定点あたり 報告数	2020年第19週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	0.63	41%減	5.32	20歳以上_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.31	26%減	2.27	20歳以上_18%
3	3	突発性発しん	0.23	6%減	0.47	1歳未満_42%
4	4	水痘	0.08	25%減	0.36	2歳、4歳、5歳、10-14歳、 20歳以上_13%
5	5	流行性角結膜炎	0.06	25%減	0.25	20歳以上_100%

〔突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。〕

第19週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い・咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がっている。世界保健機関 (WHO) は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言を発生させ、大阪府を含む7府県が対象地域に指定された。感染拡大を防止するため、3密の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められている。これまでの知見から、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (平均5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い・咳エチケットの徹底、換気、早期探知、封じ込めが重要である。

緊急事態宣言 (発出)

その他のグラフはこちら↓

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)

[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

[感染症情報センター-新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能 三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
4類感染症 レジオネラ症(肺炎型)	2			1		1			35
5類感染症	カルバペネム耐性菌内臓器科細菌感染症	1						1	42
	急性弛緩性麻痺	1	1						1
	慢性的肺炎球菌感染症	1							1
	梅毒	3						1	3
	パロチキナシ菌性細菌感染症	3	1	1				1	9
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	61							1,757	
結果 (2020年3月分)	結果 新登録患者数: 135名 (内 肺・感染症採菌性 47名) 府内累積報告数 398名、内 肺・感染症採菌性 141名								(2020年5月12日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第20週 (5月11日～5月17日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

〔小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少〕

第20週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は399例であり、前週比44.6%増であった(2019年第20週 2,993例、前年比86.7%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ0.96、0.36、0.36、0.09、0.07であった。

感染性胃腸炎は前週比54%増の189例で、南河内1.63、中河内1.55、大阪市南部1.22、三島1.12、北河内1.11である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比17%増の70例で、大阪市西部0.56、中河内0.55、南河内0.50であった。水痘は前週比20%増の18例で、南河内・中河内0.25、北河内0.15であった。

手足口病は前週比250%増の14例で、南河内・北河内0.19、三島0.12である。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

20週 の順位	19週 の順位	感染症	2020年 第20週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第20週の 定点あたり 報告数	2020年第20週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	0.96	54%増	6.72	20歳以上_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.36	17%増	3.08	10-14歳_17%
2	3	突発性発しん	0.36	56%増	0.43	1歳_50%
4	4	水痘	0.09	20%増	0.22	8、10-14歳_17%
5	9	手足口病	0.07	250%増	2.55	1歳_43%

〔突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。〕

第20週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い・咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がっている。世界保健機関 (WHO) は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言を発生させ、大阪府は感染拡大警戒地域に指定された。5月16日以降は、自粛要請・解除などの対策を段階的に実施する大阪モデルをふまえ、これまでの自粛要請等を一部解除している。

これまでの知見から、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められ、早期探知、封じ込めが重要である。

緊急事態宣言 (発出)

その他のグラフはこちら↓

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)

[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

[感染症情報センター-新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能 三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	1			1					15
慢性的肺炎球菌感染症	1		1						60
5類感染症	梅毒	6	1			2			3
	百日咳	2						1	1
	薬剤耐性アネクトバクター感染症	1		1					1
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	22							1,783	
結果 (2020年3月分)	結果 新登録患者数: 135名 (内 肺・感染症採菌性 47名) 府内累積報告数 398名、内 肺・感染症採菌性 141名								(2020年5月19日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第21週 (5月18日～5月24日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年と同時期に比べ、大幅な減少」

第21週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は405例であり、前週比1.5%増であった(2019年第21週 3,417例、前年比88.1%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘、流行性耳下腺炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ11.20、0.34、0.27、0.07、0.07である。感染性胃腸炎は前週比24%増の234例で、南河内2.06、中河内2.05、泉州1.60、大阪府北部1.21、三島・北河内1.12であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比24%減の53例で、大阪府西部0.67、泉州・中河内0.50である。水痘は前週比28%減の13例で、大阪府北部0.21、大阪府東部0.20、南河内0.13であった。流行性耳下腺炎は前週比18%増の13例で、北河内0.15、大阪府東部0.13、三島0.12であった。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第21週の順位	第20週の順位	感染症	2020年 第21週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第21週の 定点あたり 報告数	2020年第21週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.20	24%増	6.91	10-14歳_17%
2	2	突発性発疹	0.34	6%減	0.49	1歳_62%
3	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.27	24%減	3.03	3歳_15%
4	4	水痘	0.07	28%減	0.31	10-14歳_23%
4	8	流行性耳下腺炎	0.07	18%増	0.12	3歳_31%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第21週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に世界的大流行(パンデミック)を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発せられ、大阪府は感染拡大警戒地域に指定されたが、5月21日に解除された。5月16日以降は、自粛要請・解除などの対策を段階的に実施する大阪モデルをふまえて、これまでの自粛要請等を一部解除している。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間11～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器障害等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められ、早期探知、封じ込めが重要である。

緊急事態宣言(4/7-5/21)

感染疫学センターはこちら(外部リンク)

[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

その他のグラフはこちら!

[感染症情報センター 新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積
4類感染症	A型肝炎	1		1					4
	アムニオニオシス	2				1	1	1	22
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2							2
	鉤状菌性溶血性レンサ球菌感染症	3		1	1				1
5類感染症	後天性免疫不全症候群	1							1
	保護性インフルエンザ菌感染症	2					2	1	34
	保護性肺炎球菌感染症	1					1	1	62
	梅毒	10		1	1			8	265
	百日咳	1						1	94
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	9							1,801
結核 (2020年4月分)	結核 新登録患者数: 96名	(内 肺・喉痰塗抹陽性 37名) (府内累積報告数 493名、内 肺・喉痰塗抹陽性 181名)							

(2020年5月26日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第22週 (5月25日～5月31日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年と同時期に比べ、大幅な減少」

第22週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は469例であり、前週比15.8%増であった(2019年第22週 3,584例、前年比86.9%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ11.19、0.38、0.34、0.12、0.12であった。

感染性胃腸炎は前週比0.4%減の233例で、南河内2.06、中河内2.05、泉州1.55、大阪府北部1.29、北河内1.23であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比26%増の67例で、泉州0.60、大阪府北部0.50、大阪府南部0.44である。手足口病は前週比380%増の24例で、南河内0.38、北河内0.27、大阪府南部0.17であった。流行性角結膜炎は前週比500%増の6例で、泉州0.33、南河内0.25、三島0.25であった。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第22週の順位	第21週の順位	感染症	2020年 第22週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第22週の 定点あたり 報告数	2020年第22週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.19	0.4%減	6.79	20歳以上_15%
2	2	突発性発疹	0.38	12%増	0.51	1歳_51%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.34	26%増	3.37	4歳_16%
4	8	手足口病	0.12	380%増	4.72	1歳_33%
5	9	流行性角結膜炎	0.12	500%増	0.31	20歳以上_100%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第22週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に拡がりを見せている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に世界的大流行(パンデミック)を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発せられ、大阪府は感染拡大警戒地域に指定されたが、5月21日に解除された。5月16日以降は、自粛要請・解除などの対策を段階的に実施する大阪モデルをふまえて、これまでの自粛要請等を一部解除している。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間11～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器障害等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避や外出自粛など、行動変容が強く求められ、早期探知、封じ込めが重要である。

緊急事態宣言(4/7-5/21)

感染疫学センターはこちら(外部リンク)

[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

その他のグラフはこちら!

[感染症情報センター 新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積
3類感染症	細菌性溶血性大腸菌感染症	2	2						16
	アムニオニオシス	1							1
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	4							4
	クリプトスポリジウム症	1							1
	鉤状菌性溶血性レンサ球菌感染症	1							1
5類感染症	後天性免疫不全症候群	3	1	1					2
	保護性インフルエンザ菌感染症	1							1
	保護性肺炎球菌感染症	1							1
	水痘(入国前)	1						1	5
	梅毒	10	2	2	1			7	289
	百日咳	2						2	97
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	3							1,799
結核 (2020年4月分)	結核 新登録患者数: 96名	(内 肺・喉痰塗抹陽性 37名) (府内累積報告数 493名、内 肺・喉痰塗抹陽性 181名)							

(2020年6月2日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第23週 (6月1日～6月7日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少」

第23週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は522例であり、前週比11.3%増であった。(2019年 第23週 4,098例、前年比 87.3%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.49、0.47、0.37、0.10、0.08であった。感染性胃腸炎は前週比25%増の291例で、南河内2.94、中河内2.15、泉州1.85、三島1.59、堺市1.39である。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比9%増の73例で、南河内0.56、泉州0.55、三島0.53、大阪市北部、北河内共に0.50であった。水痘は前週比11%増の20例で、中河内0.20、北河内0.19、豊能0.18である。手足口病は前週比38%減の15例で、大阪市南部0.22、北河内0.19、南河内0.13であった。

感染性胃腸炎

2020.1w～
2019.1w～
警戒レベル: 20
注意報レベル: 未設定

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

2020.1w～
2019.1w～
警戒レベル: 20
注意報レベル: 未設定

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第23週6月1日～6月7日)

第23週 の順位	第22週 の順位	感染症	2020年 第23週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第23週 の定点あたり 報告数	2020年第23週の 年別別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.49	25%増	6.34	10-14歳_18%
2	2	突発性発疹	0.47	24%増	0.44	1歳_50%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.37	9%増	3.32	5歳_16%
4	6	水痘	0.10	11%増	0.27	2歳_25%
5	4	手足口病	0.08	38%減	7.09	1歳_40%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第23週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が世界的に広がりを来している。世界保健機関 (WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発出され、大阪府は感染拡大を地域に指定されたが、5月21日に解除された。自粛要請・解除などの対策を積極的に実施する大府であるが、6月1日以降は、全ての施設が休止要請が解除された。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

その他のグラフはこちら↓
[感染症情報センター 新型コロナウイルス感染症関連情報](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第23週6月1日～6月7日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載します。詳細は感染症情報センターホームページ【週報】発生動向調査>全数報告をご覧ください。新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。)

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	1		1							17
日本紅斑熱	1								1	1
4類感染症	1				1					37
レジオネラ症 (肺炎型)	1			1						24
アメーバ症	1									24
カルバペム内臓内臓科細菌感染症	1						1	1		52
急性脳炎	2					1				13
5類感染症	2									23
細菌型溶血性レンサ球菌感染症	1								1	23
後天性免疫不全症候群	2			1						40
細菌性肺炎球菌感染症	1					2				64
梅毒	8				1		1		6	405
百日咳	1								1	98
指定感染症	3									1805
結核 (2020年4月分)	結核 新登録患者数: 96名 (府内累積報告数 493名、内 肺・喀痰塗抹陽性 181名)									

(2020年6月9日 集計)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第24週 (6月8日～6月14日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年の同時期に比べ、大幅な減少」

第24週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は618例であり、前週比18.4%増であった。(2019年 第24週 4,648例、前年比 86.7%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性角結膜炎、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.67、0.61、0.48、0.10、0.09であった。感染性胃腸炎は前週比12%増の327例で、南河内2.81、大阪市西部2.10、大阪市南部2.00、泉州1.80、三島1.65であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は29%増の94例で、泉州0.95、三島0.82、北河内0.69、中河内0.55、南河内0.50であった。流行性角結膜炎は前週比67%増の5例で、北河内0.33、南河内0.25、大阪市北部0.20、泉州0.17であった。手足口病は20%増の20例で、大阪市南部0.28、大阪市東部0.20、中河内0.15、大阪市北部0.14であった。

感染性胃腸炎

2020.1w～
2019.1w～
警戒レベル: 20
注意報レベル: 未設定

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

2020.1w～
2019.1w～
警戒レベル: 8
注意報レベル: 未設定

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第24週6月8日～6月14日)

第24週 の順位	第23週 の順位	感染症	2020年 第24週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第24週 の定点あたり 報告数	2020年第24週の 年別別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.67	12%増	5.61	10-14歳_17%
2	2	突発性発疹	0.61	29%増	0.49	1歳_54%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.48	29%増	2.86	20歳以上_17%
4	6	流行性角結膜炎	0.10	67%増	0.29	20歳以上_100%
5	5	手足口病	0.09	20%増	1.05	2歳_33%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第24週のコメント

～レジオネラ症～ 2019年の報告数は133例でした。

全数把握感染症

レジオネラ症

レジオネラ症は、レジオネラ・ニューモフィラ (*Legionella pneumophila*) を代表とするレジオネラ属による細菌感染症である。土壌や水環境に、普遍的に存在する菌である。人工環境 (噴水等の水景施設、ビル屋上立つ冷却塔、ジャグジー、加湿器等) や循環水を利用した風呂から発生したレジオネラ属菌を含むエアロゾルを吸入することで感染する。病型として肺炎型と一過性で自然に改善するポインツグ熱型がある。ヒト-ヒト感染はない。健康者も罹患するが、細胞性免疫機能が低下している、乳幼児、高齢者など、喫煙者、大酒家は重症化する可能性が高い。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[レジオネラ症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第24週6月8日～6月14日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載します。詳細は感染症情報センターホームページ【週報】発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	6	2						1	3	24
4類感染症	3				1				1	41
急性脳炎	1					1				13
5類感染症	3			1				1		44
後天性免疫不全症候群	9		1		1					422
梅毒	1									1100
百日咳	1									178
結核 (2020年4月分)	結核 新登録患者数: 96名 (府内累積報告数 493名、内 肺・喀痰塗抹陽性 181名)									

新型コロナウイルス感染症の集計は、6月8日から6月14日の大阪府の報告数を示しています。
[詳細リンク先の情報をご覧ください。](#)

(2020年6月16日 集計)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2020年 第25週 (6月15日～6月21日)

今週のコメント

～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「小児科・眼科定点疾患の報告数 昨年と同時期に比べ、大幅な減少」

第25週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は649例であり、前週比5.0%増であった(2019年 第25週 4,336例、前年比85.0%減)。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、流行性耳下腺炎・流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.92、0.55、0.42、0.13、0.08、0.08である。

感染性胃腸炎は前週比15%増の377例で、南河内3.00、中河内2.85、大阪市南部2.44、泉州2.20、豊能1.86であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%減の83例で、大阪市東部0.93、中河内0.80、三島0.76、北河内0.54、堺市0.39である。

手足口病は44%減の26例で、大阪市北部0.36、北河内0.35、堺市0.17、南河内0.13であった。

流行性耳下腺炎は23%増の16例で、南河内0.19、泉州0.15、中河内0.10、豊能0.09、北河内0.08である。

流行性角結膜炎は20%減の4例で、北河内0.33、南河内0.25、泉州0.17であった。

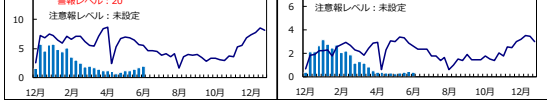


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第25週6月15日～6月21日)

第25週 の順位	第24週 の順位	感染症	2020年 第25週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第25週の 定点あたり 報告数	2020年第25週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.92	15%増	5.51	10-14歳, 20歳以上_14%
2	2	突発性発疹	0.55	9%減	0.44	1歳_49%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.42	12%減	2.59	4歳_23%
4	5	手足口病	0.13	44%増	9.15	2歳_27%
5	8	流行性耳下腺炎	0.08	23%増	0.05	6歳_38%
5	4	流行性角結膜炎	0.08	20%減	0.42	20歳以上_100%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

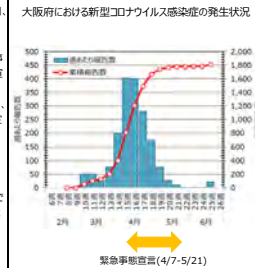
第25週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に広がりを見せている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発出され、大阪府は感染拡大警戒地域に指定されたが、5月21日に解除された。自粛要請・解除などの対策を段階的に実施する大阪モデルをふまえ、6月1日以降は、全ての施設の休止要請が解除された。



これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは重症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第25週6月15日～6月21日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【調査】発生動向調査>全数報告をご覧ください)

疾患名 ()内の疾患は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	8		2	1			3	1	1	34
4類感染症	1								1	5
5類感染症	1				1					46
	1									20
	1									6
指定感染症	14	1	1	1				1	11	443
	22									1809
総括 (2020年4月分)	総括	新登録患者数: 96名 (内 肺-喉頭塗抹陽性 37名) 府内累積報告数 493名、内 肺-喉頭塗抹陽性 181名								

新型コロナウイルス感染症の集計は、6月15日から6月21日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。(2020年6月23日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2020年 第26週 (6月22日～6月28日)

今週のコメント

～感染性胃腸炎～ 手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 4週連続して増加」

第26週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は7403例であり、前週比8.3%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発疹、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.08、0.60、0.53、0.08、0.08である。

感染性胃腸炎は前週比8%増の407例で、南河内3.31、中河内2.80、大阪市西部2.70、泉州2.60、大阪市南部2.44であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は41%増の117例で、中河内1.40、泉州1.05、大阪市東部0.93である。

流行性角結膜炎は4例で、大阪市東部0.33、堺市0.20、北河内0.17であった。

咽頭結膜熱は36%増の15例で、中河内0.20、泉州0.15、大阪市北部0.14であった。

手足口病は42%減の15例で、北河内0.15、大阪市東部1.4、南河内0.13である。

小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は、昨年同時期と比べて83.0%減(2019年 第26週 4,131例)と少ない状況であるが、第26週以降増加を続けているので、今後の発生動向に注意が必要と思われる。

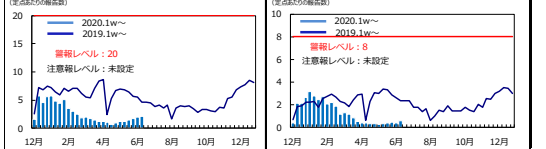


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第26週6月22日～6月28日)

第26週 の順位	第25週 の順位	感染症	2020年 第26週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第26週の 定点あたり 報告数	2020年第26週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.08	8%増	4.61	10-14歳_15%
2	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.60	41%増	2.39	2歳_15%
3	2	突発性発疹	0.53	4%減	0.48	1歳_57%
4	6	流行性角結膜炎	0.08	増減なし	0.25	20歳以上_75%
4	7	咽頭結膜熱	0.08	36%増	0.68	1歳_40%
4	4	手足口病	0.08	42%減	9.04	1歳_47%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

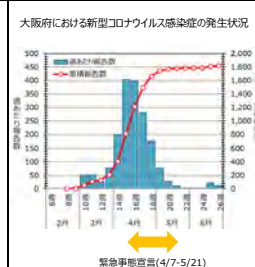
第26週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認されて以降、感染が国際的に広がりを見せている。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発出され、大阪府は感染拡大警戒地域に指定されたが、5月21日に解除された。自粛要請・解除などの対策を段階的に実施する大阪モデルをふまえ、6月1日以降は、全ての施設の休止要請が解除された。



これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第26週6月22日～6月28日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【調査】発生動向調査>全数報告をご覧ください)

疾患名 ()内の疾患は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	6		2				1	1	2	38
4類感染症	5			2			2		1	47
5類感染症	2			1						26
	1									57
	1									9
指定感染症	12	1	1	1	1					1821
総括 (2020年4月分)	総括	新登録患者数: 96名 (内 肺-喉頭塗抹陽性 37名) 府内累積報告数 493名、内 肺-喉頭塗抹陽性 181名								

新型コロナウイルス感染症の集計は、6月22日から6月28日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。(2020年6月30日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第27週 (6月29日～7月5日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱 増加」

第27週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は751例であり、前週比6.8%増であった。昨年同時期と比べて82.1%減(2019年 第27週 4,205例)と少ない状況である。第20週以降増加を続けているので、今後の発生動向に注意が必要と思われる。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発疹、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.08、0.63、0.53、0.17、0.15であった。

感染性胃腸炎は前週と同数の407例で、南河内3.00、大阪府西部2.70、大阪府南部2.67、泉州2.60、豊能2.41である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%増の123例で、北河内0.96、南河内0.94、大阪府南部0.83であった。

流行性角結膜炎は125%増の9例で、豊能0.40、大阪府東部0.33、三島、大阪府南部0.25である。

咽頭結膜熱は93%増の29例で、中河内0.80、大阪府東部0.20、北河内0.15であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

流行性角結膜炎

第27週 の順位	第26週 の順位	感染症	2020年 第27週 の定点 あたり 報告数	前週 比 増減	2019年 第27週 の 定点 あたり 報告数	2020年 第27週 の 年齢別 患者 発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.08	増減なし	4.69	20歳以上_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.63	5%増	2.35	10-14歳_14%
3	3	突発性発疹	0.53	1%減	0.46	1歳_57%
4	4	流行性角結膜炎	0.17	125%増	0.54	20歳以上_78%
5	5	咽頭結膜熱	0.15	93%増	0.66	1歳_28%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第27週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗い・咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言し、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

4月7日、改正新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づき、緊急事態宣言が発出され、大阪府は感染拡大警戒地域に指定されたが、5月21日に解除された。自粛要請・解除などの対策を段階的に実施する大取組を進め、6月1日以降は、全ての施設の休業要請が解除された。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器等での症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

流行性角結膜炎

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	泉 州	大 阪 府	府 内 累 積 数	
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	7			2	1	1		1	2	47
4類感染症 レジオネラ症(肺炎型)	1							1		18
5類感染症 ウイルス性肝炎	1							1		14
カルバペナム耐性腸内細菌科細菌感染症	1				1					60
後天性免疫不全症候群	1								1	48
慢性肺炎球菌感染症	2							1	1	67
梅毒	4	2							2	481
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	64									1885
結果	結果 新登録患者数: 68名	(内 肺・喉炎速発型性 27名)								
(2020年5月分)		(府内累積報告数 571名、内 肺・喉炎速発型性 209名)								

新型コロナウイルス感染症の集計は、6月29日から7月5日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。(2020年7月7日 集計分)

詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第28週 (7月6日～7月12日)

今週のコメント
～A群溶血性レンサ球菌咽頭炎～ 手洗い、うがい、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、増加続く」

第28週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は741例であり、前週比1.3%減であった。昨年同時期と比べて81.9%減(2019年 第28週 4,104例)と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発疹、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.09、0.67、0.55、0.13、0.11であった。

感染性胃腸炎は微増の409例で、中河内3.15、南河内3.06、大阪府北部2.43、北河内2.23、泉州2.20である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%増の132例で、中河内1.65、大阪府南部1.00、三島0.82であった。

咽頭結膜熱は14%減の25例で、泉州0.35、大阪府南部0.28、豊能0.23であった。

ヘルパンギーナは5%増の21例で、泉州0.75、三島0.12、北河内0.08であった。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第28週 の順位	第27週 の順位	感染症	2020年 第28週 の定点 あたり 報告数	前週 比 増減	2019年 第28週 の 定点 あたり 報告数	2020年 第28週 の 年齢別 患者 発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.09	微増	4.38	10-14歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.67	7%増	2.34	5歳_17%
3	3	突発性発疹	0.55	5%増	0.42	1歳_59%
4	5	咽頭結膜熱	0.13	14%減	0.68	1歳_40%
5	7	ヘルパンギーナ	0.11	5%増	2.21	1歳_43%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第28週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗い・咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言し、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪府のモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒レベル(黄色)が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸器等での症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

疾患名 ()内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	泉 州	大 阪 府	府 内 累 積 数		
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	5	1						1	3	52	
4類感染症 A型肝炎	1	1								6	
4類感染症 日本紅斑熱	1	1								3	
4類感染症 レジオネラ症(肺炎型)	2							2		50	
5類感染症 ウイルス性肝炎(B型)	1	1								16	
慢性肺炎球菌感染症	1					1				28	
梅毒	12	3		2				1	2	4	510
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	142									2027	
結果	結果 新登録患者数: 68名	(内 肺・喉炎速発型性 27名)									
(2020年5月分)		(府内累積報告数 571名、内 肺・喉炎速発型性 209名)									

新型コロナウイルス感染症の集計は、7月6日から7月12日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。(2020年7月14日 集計分)

詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第29週 (7月13日～7月19日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「ヘルパンギーナ・咽頭結膜熱 増加」

第29週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は764例であり、前週比3.1%増であった。昨年同時期に比べて77.0%減(2019年 第29週 3,326例)と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.13、0.62、0.57、0.16、0.15であった。

感染性胃腸炎は2%増の417例で、中河内3.75、泉州3.00、南河内2.69、大阪府南部2.61、北河内1.81である。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は8%減の122例で、中河内1.15、南河内0.94、泉州0.85であった。

ヘルパンギーナは48%増の31例で、泉州1.30、大阪府北部0.21、中河内0.05である。

咽頭結膜熱は20%増の30例で、泉州0.35、大阪府南部0.28、北河内0.23であった。

ヘルパンギーナ

咽頭結膜熱

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第29週7月13日～7月19日)

第29週の順位	第28週の順位	感染症	2020年第29週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第29週の定点あたり報告数	2020年第29週の年齢別患者発生数最大新合計
1	1	感染性胃腸炎	2.13	2%増	3.78	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.62	8%減	1.80	10-14歳_16%
3	3	突発性発しん	0.57	3%増	0.40	1歳_55%
4	5	ヘルパンギーナ	0.16	48%増	1.89	1歳_42%
5	4	咽頭結膜熱	0.15	20%増	0.55	1歳_50%

(突発性発しんについては、(1)季節変動はない、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異はほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第29週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒信号(黄色)が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部の場合は、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防止するには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第29週7月13日～7月19日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	6	1				1			4	59
4類感染症 ポリオス症	1								1	1
4類感染症 レジオネラ症(肺炎型)	7			2	2		2		1	58
5類感染症 カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1				1					63
5類感染症 侵袭型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					29
5類感染症 侵袭性肺炎球菌感染症	2		1				1			70
5類感染症 梅毒	3						1		2	520
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	393									2420
結核 (2020年5月分)	総数 新登録患者数: 68名	(内 肺・喉痰塗抹陽性 27名) (府内累積報告数 571名、内 肺・喉痰塗抹陽性 209名)								

新型コロナウイルス感染症の集計は、7月13日から7月19日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第30週 (7月20日～7月26日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「夏型感染症(咽頭結膜熱、ヘルパンギーナ) 今後の動向に注意」

第30週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は599例であり、前週比21.6%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.60、0.46、0.39、0.15、0.15であった。

感染性胃腸炎は前週比25%減の314例で、泉州2.45、中河内2.45、大阪府南部1.94、大阪府西部1.60、南河内1.50である。

突発性発しんは前週比18%減の91例で、大阪府北部0.86、中河内0.65、南河内0.63であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比38%減の76例で、中河内0.80、北河内0.62、南河内0.50であった。

咽頭結膜熱は前週比0%増の30例で、南河内0.31、大阪府南部0.28、三島0.24であった。

ヘルパンギーナは前週比6%減の3例で、泉州0.65、南河内0.25、大阪府北部0.14であった。

インフルエンザは●の1例で、定点あたり報告数は0.00であった。大阪府西部0.07、大阪府南部0.00、大阪府東部0.00、泉州0.00、堺市0.00であった。

咽頭結膜熱

ヘルパンギーナ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第30週7月20日～7月26日)

第30週の順位	第29週の順位	感染症	2020年第30週の定点あたり報告数	前週比増減	2019年第30週の定点あたり報告数	2020年第30週の年齢別患者発生数最大新合計
1	1	感染性胃腸炎	1.60	25%減	4.17	1歳_15%
2	3	突発性発しん	0.46	18%減	0.42	1歳_55%
3	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.39	38%減	1.77	10-14歳_20%
4	5	咽頭結膜熱	0.15	0%増	0.67	1歳_43%
5	4	ヘルパンギーナ	0.15	6%減	1.93	1歳_28%
参考		インフルエンザ(インフルエンザ定点報告疾患)	0.00		0.05	1歳_100%

第30週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒信号(黄色)が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部の場合は、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防止するには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第30週7月20日～7月26日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	3					1	1	1	1	63
4類感染症 レジオネラ症	4	1			1	1			1	62
5類感染症 アメーバ赤痢	1									31
5類感染症 侵袭性肺炎球菌感染症	2				1					74
5類感染症 梅毒	2								2	537
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	586									3040
結核 (2020年5月分)	総数 新登録患者数: 68名	(内 肺・喉痰塗抹陽性 27名) (府内累積報告数 571名、内 肺・喉痰塗抹陽性 209名)								

新型コロナウイルス感染症の集計は、7月20日から7月26日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第31週 (7月27日～8月2日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、感染者との密な接触を避けることが重要

定点把握感染症

「夏型感染症 (咽頭結膜熱、ヘルパンギーナ) 増加続く」

第31週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は764例であり、前週比27.5%増 (増減なし) であった。昨年同時期と比べて72.1%減 (2019年 第31週 2,734例) と少ない状況である。

報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.98、0.58、0.53、0.27、0.20であった。

感染性胃腸炎は前週比24%増 (7%減) の389例で、南河内3.19、中河内2.60、泉州2.35、大阪市南部2.17、北河内2.08である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は36%増 (16%減) の103例で、南河内1.06、中河内0.90、大阪市西部0.70であった。

咽頭結膜熱は77%増 (77%増) の53例で、泉州0.55、北河内・南河内0.38である。

ヘルパンギーナは38%増 (29%増) の40例で、泉州1.00、大阪市北部0.36、三島0.24であった。

※ 第30週の各科定点疾患の報告数には休日に係る診療日数減の影響がみられたため、(カッコ内) に第29週比の値を併記した。

咽頭結膜熱

ヘルパンギーナ

第31週 の順位	第30週 の順位	感染症	2020年 第31週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第31週 の定点あたり 報告数	2020年第31週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.98	24%増	3.55	10-14歳_17%
2	2	突発性発疹	0.58	25%増	0.46	1歳_54%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.53	36%増	1.41	10-14歳_21%
4	4	咽頭結膜熱	0.27	77%増	0.66	1歳_57%
5	5	ヘルパンギーナ	0.20	38%増	1.70	1歳_40%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第31週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ペロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(ホー)157、O26、O111がある。汚染された食肉を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こすことがある。3-5日の潜伏期を経て、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報告数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	6	4						1	1	70
4類感染症 日本紅斑熱	1								1	4
5類感染症	アメーバ赤痢	1	1							32
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1					1		69
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1							1	4
	慢性的肺炎球菌感染症	1							1	76
	梅毒	6	1			1			4	556
指定感染症 新種クリプトコックス症	1					1			3	
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	1,258									4,446
結核 (2020年6月分)	結核 新登録患者数: 67名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 29名)									239名

(府内累積報告数 640名、内 肺・喀痰塗抹陽性 239名) (2020年8月4日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、7月27日から8月2日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第32週 (8月3日～8月9日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、感染者との密な接触を避けることが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱減少、ヘルパンギーナは増加」

第32週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は586例であり、前週比23.3%減であった。昨年同時期と比べて74.6%減 (2019年 第32週 2,306例) と少ない状況である。

報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、突発性発疹、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.55、0.42、0.36、0.22、0.14であった。

感染性胃腸炎は前週比22%減の304例で、大阪市西部2.90、大阪市南部2.11、泉州1.85、南河内1.81、豊能1.73である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は32%減の70例で、大阪市西部0.61、泉州0.55、中河内0.50であった。

ヘルパンギーナは10%増の44例で、泉州0.80、三島0.59、大阪市西部0.50である。

咽頭結膜熱は49%減の27例で、泉州0.40、中河内0.25、大阪市西部0.22であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

ヘルパンギーナ

第32週 の順位	第31週 の順位	感染症	2020年 第32週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第32週 の定点あたり 報告数	2020年第32週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.55	22%減	3.99	20歳以上_22%
2	2	突発性発疹	0.42	28%減	0.47	1歳_48%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.36	32%減	1.65	6歳_21%
4	5	ヘルパンギーナ	0.22	10%増	1.46	2歳_25%
5	4	咽頭結膜熱	0.14	49%減	0.63	1歳_52%

(突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第32週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和รัฐ湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的な大流行(パンデミック)を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警報信号(黄色)が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸困難症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発症者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を抑制するには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期検出、正しい処置が重要である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報告数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	2								2	72
4類感染症 日本紅斑熱	1	1								5
4類感染症	マラリア (病形)	1							1	3
	レジオネラ症 (肺炎型)	1	1							65
	アメーバ赤痢	1	1							33
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1		1						72
	急性弛緩性麻痺	1								2
	後天性免疫不全症候群	1							1	57
	慢性的肺炎球菌感染症	2		1	1					78
	梅毒	4	2	1					1	567
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	1,323									5,769
結核 (2020年6月分)	結核 新登録患者数: 67名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 29名)									239名

(府内累積報告数 640名、内 肺・喀痰塗抹陽性 239名) (2020年8月11日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、8月3日から8月9日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第33週 (8月10日～8月16日)

今週のコメント
 ～感染症予防の基本～ 手洗い、感染者との密な接触を避けることが重要

定点把握感染症

「咽頭結膜熱 再び増加」

第33週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は394例であり、前週比32.8%減であった。昨年同時期と比べて66.8%減(2019年 第33週 1,185例)と少ない状況である。第33週の報告の解釈については、医療機関の診療実日数と受診者の減少を考慮する必要がある。
 報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ0.85、0.33、0.27、0.22、0.15であった。
 感染性胃腸炎は前週比45%減の166例で、泉州1.40、大阪府西部1.20、中河内1.15、南河内1.00、三島0.88である。
 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は24%減の53例で、北河内0.58、泉州0.40、中河内・大阪府西部0.30であった。
 咽頭結膜熱は63%増の44例で、三島0.47、中河内・泉州0.35である。
 ヘルパンギーナは34%減の29例で、大阪府北部0.50、泉州0.45、三島0.24であった。

咽頭結膜熱

注: 前週比: 63%増

ヘルパンギーナ

注: 前週比: 34%減

第33週の順位	第32週の順位	感染症	2020年 第33週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第33週の 定点あたり 報告数	2020年第33週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	0.85	45%減	1.67	1歳_19%
2	2	突発性発しん	0.33	21%減	0.18	1歳_58%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.27	24%減	0.64	2歳, 3歳_17%
4	5	咽頭結膜熱	0.22	63%増	0.37	1歳_57%
5	4	ヘルパンギーナ	0.15	34%減	0.58	1歳_52%

(突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第33週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗いや咳エチケットなど)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態に、3月11日に「世界的大流行(パンデミック)」を宣告した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。
 6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を越えたため、7月12日、警戒レベル(黄色)が点灯した。
 これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が出現し持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発症者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。
 感染拡大予防には、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。
 詳細はリンク先の情報をご覧ください。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

	疾患名 ()内の病名は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7	2				1			4	79
4 類感染症	レジオネラ症(肺炎型)	3			1			1		1	68
5 類感染症	アメーバ赤痢	1								1	34
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	3								1	82
	細菌性溶血性レンサ球菌感染症	1								1	32
	後天性免疫不全症候群	1								1	60
	慢性的肺炎球菌感染症	1					1				81
	梅毒	4								4	582
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	1,076									6,845
総括 (2020年6月分)	総括 新登録患者数: 67名 (内 肺-感染症 29名)										(府内累積報告数 640名、内 肺-感染症 239名)

新型コロナウイルス感染症の集計は、8月10日から8月16日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
 詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第34週 (8月17日～8月23日)

今週のコメント
 ～感染症予防の基本～ 手洗い、感染者との密な接触を避けることが重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎、咽頭結膜熱、増加」

第34週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は469例であり、前週比76.9%増(18.9%増)であった。昨年同時期と比べて63.8%減(2019年 第34週 1,928例)と少ない状況である。
 定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.87、0.47、0.39、0.29、0.23であった。
 感染性胃腸炎は前週比121.0%増(20.7%増)の367例で、中河内3.10、泉州2.70、南河内2.63、大阪府南部1.94、三島1.82である。
 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比45.2%増(10%増)の77例で、中河内0.95、北河内0.65、泉州0.45、南河内0.44であった。
 咽頭結膜熱は前週比29.5%増(111.1%増)の57例で、中河内0.80、三島0.53、北河内0.35であった。
 ヘルパンギーナは前週比55.2%増(2.3%増)の45例で、泉州1.10、大阪府北部0.29、大阪府南部0.22である。
 突発性発しんは昨年同時期と比べて4%減の92例(2019年 第34週 96例)と報告数は変わらない(表1の下を参照)。
 ※ 第33週の小児科定点疾患の報告数には連休による診療日数減少の影響がみられたため、(カッコ内)に第32週比の値を併記した。

感染性胃腸炎

注: 前週比: 121%増

咽頭結膜熱

注: 前週比: 29%増

第34週の順位	第33週の順位	感染症	2020年 第34週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第34週の 定点あたり 報告数	2020年第34週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.87	121%増	3.54	20歳以上_17%
2	2	突発性発しん	0.47	42%増	0.49	1歳_54%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.39	45%増	1.03	5歳_19%
4	4	咽頭結膜熱	0.29	30%増	0.47	1歳_61%
5	5	ヘルパンギーナ	0.23	55%増	0.76	1歳_31%

(突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第34週のコメント

～バンコマイシン耐性腸球菌感染症～ 2019年の報告数は、大阪府が全国で第一位である

全数把握感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌(VRE)は、バンコマイシンに耐性を獲得した腸球菌である。術後患者や感染防御機能の低下した患者では腹膜炎、術創感染症、肺炎、敗血症などの感染症を引き起こす場合があるため、集中治療室や外科治療ユニットなど重症患者を治療する部門で問題となっており、臨床的、疫学的に重要な薬剤耐性菌である。VREによる術創感染症や腹膜炎などの治療は、抗菌薬の投与とともに感染巣の洗浄やドレーンなどを適宜組み合わせて行う。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[バンコマイシン耐性腸球菌感染症\(国立感染症研究所\)](#)

	疾患名 ()内の病名は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数	
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6			2			1	2	1	88	
4 類感染症	レジオネラ症(肺炎型)	1								1	71	
5 類感染症	アメーバ赤痢	2						1		1	36	
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2			1						86	
	後天性免疫不全症候群	1								1	62	
	慢性的インフルエンザウイルス感染症	1					1				22	
	梅毒	5						1			4	596
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	2			1						14	
	風しん	1									1	6
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	996									7,841	
総括 (2020年6月分)	総括 新登録患者数: 67名 (内 肺-感染症 29名)										(府内累積報告数 640名、内 肺-感染症 239名)	

新型コロナウイルス感染症の集計は、8月17日から8月23日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
 詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第35週 (8月24日～8月30日)

今週のコメント
～ヘルパンギーナ～ 手洗いが重要

定点把握感染症

「ヘルパンギーナ 増加」

第35週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は前週比3.0%増の718例であった。昨年同時期と比べて71.1%減 (2019年 第35週2,485例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性角結膜炎の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.95、0.48、0.41、0.38、0.25であった。

感染性胃腸炎は前週比4%増の383例で、大阪府南部3.50、南河内3.44、中河内2.40、大阪府西部2.00、三島1.88である。

ヘルパンギーナは78%増の80例で、泉州1.60、大阪府南部0.72、南河内0.44であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%減の74例で、北河内0.73、南河内0.69、中河内0.45である。

流行性角結膜炎は44%増の13例で、泉州0.67、南河内・大阪府西部0.50であった。

第6位の咽頭結膜熱は39%減の35例で、定点あたり報告数は0.18であり、中河内0.40、大阪府南部0.39、北河内0.23であった。

感染性胃腸炎

ヘルパンギーナ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第35週8月24日～8月30日)

第35週の順位	第34週の順位	感染症	2020年 第35週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第35週の 定点あたり 報告数	2020年第35週の 年別別 患者発生数 前大前合値
1	1	感染性胃腸炎	1.95	4%増	4.01	1歳_16%
2	2	突発性発しん	0.48	3%増	0.51	1歳_57%
3	5	ヘルパンギーナ	0.41	78%増	0.96	1歳_38%
4	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.38	4%減	1.50	4歳_20%
5	6	流行性角結膜炎	0.25	44%増	0.54	20歳以上_85%

(突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。)

第35週のコメント

～ボツリヌス症～ 大阪府では、2011年以来今年2例の報告がありました

全数把握感染症

ボツリヌス症

ボツリヌス症は、ボツリヌス菌 (*Clostridium botulinum*) が産生する毒素によって起こる全身の神経、筋の麻痺性疾患である。ボツリヌス毒素はリソザイム神経終末からのアセチルコリンの放出を抑制し、神経から筋への伝達が障害され、麻痺に至る。原因食品を摂取してから、6時間から10日間、通常18時間から48時間で発症する。典型的な臨床症状は、眼輪下重、複視、嚥下障害、構音障害等の脳神経障害であり、進行すると、咽頭筋の麻痺による気道閉塞と、横隔膜および呼吸筋における麻痺 (呼吸機能障害) をきたす。ボツリヌス症が疑われた場合は、乾燥ボツリヌス抗毒素により治療する。特に、生後1年未満の乳児がボツリヌス菌芽胞を口摂取した場合、消化管内で増殖した菌の産生したボツリヌス毒素により発症することがあるので注意が必要である。(乳児ボツリヌス症)。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[ボツリヌス症\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第35週8月24日～8月30日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

	疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6	1		2		1		1	1	93
4類感染症	ボツリヌス症	1	1								2
	レジオネラ症(肺炎型)	1			1						71
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	4				1		1		2	92
	侵袭性肺炎球菌感染症	1									1 83
	水痘(入院例)	1									1 7
	梅毒	7	1		1	1	1			3	610
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	650									8,491
結核 (2020年6月分)	結核 新登録患者数: 67名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 29名)										(府内累積報告数 640名、内 肺・喀痰塗抹陽性 239名)

(2020年9月1日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、8月24日から8月30日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第36週 (8月31日～9月6日)

今週のコメント
～ 感染症予防の基本 ～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱 増加」

第36週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は前週比7.7%増の773例であった。昨年同時期と比べて72.3%減 (2019年 第36週2,787例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、突発性発しん、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.94、0.59、0.41、0.32、0.28であった。

感染性胃腸炎は前週と同数の383例で、中河内3.15、大阪府南部3.06、南河内2.88、泉州2.10、大阪府西部2.00である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%増の81例で、大阪府北部1.00、北河内0.81、中河内0.80であった。

ヘルパンギーナは20%減の64例で、泉州1.00、大阪府南部0.78、堺市0.53であった。

咽頭結膜熱は60%増の56例で、中河内0.70、泉州0.45、北河内0.38であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

咽頭結膜熱

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第36週8月31日～9月6日)

第36週の順位	第35週の順位	感染症	2020年 第36週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第36週の 定点あたり 報告数	2020年第36週の 年別別 患者発生数 前大前合値
1	1	感染性胃腸炎	1.94	増減なし	3.86	10-14歳_16%
2	2	突発性発しん	0.59	22%増	0.49	1歳_57%
3	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.41	9%増	1.41	6歳_17%
4	3	ヘルパンギーナ	0.32	20%減	1.26	1歳_34%
5	6	咽頭結膜熱	0.28	60%増	0.60	1歳_61%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.00	増減なし	0.27	15-19歳_100%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第36週のコメント

～日本紅斑熱～ 第36週時点の報告数は7例である

全数把握感染症

日本紅斑熱

日本紅斑熱は、紅斑熱群リキチアの一つ *Rickettsia japonica* を起因病原体とし、野山でマダニに刺咬されることにより感染する。媒介マダニの活動が活発化する4月～10月に発生し、特に9月、10月は多い。自然界で飼育あるいは感染する動物として、げっ歯類、野生のシカ、イノシシなどがあげられる。

潜伏期は2～8日であり、頭痛、発熱、倦怠感を伴って発症する。発熱、発しん、刺し口が主要三徴候であるが、必ずしも、刺し口があるとは限らない。発しんは、体幹部より四肢末端部に強く出現し、検査所見では、肝臓酵素の上昇、血小板の減少が認められる。治療には、抗菌薬投与が効果的であり、第一選択薬はテトラサイクリン系の抗菌薬である。また、フルオロキノロン系抗菌薬が有効であると報告もある。β-ラクタム系の抗菌薬は全く無効である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[日本紅斑熱\(国立感染症研究所\)](#)

2016～2019年: 年間累計発生数
2020年: 36週までの発生数

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第36週8月31日～9月6日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

	疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3			2		1				99
4類感染症	日本紅斑熱	2									2 7
	レジオネラ症(肺炎型)	1						1			72
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1						1			94
	侵袭性溶血性レンサ球菌感染症	1									1 34
	侵袭性インフルエンザ感染症	1									1 23
	梅毒	6	1								5 624
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	554									9,045
結核 (2020年7月分)	結核 新登録患者数: 118名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 43名)										(府内累積報告数 834名、内 肺・喀痰塗抹陽性 304名)

(2020年9月8日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、8月31日から9月6日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第37週 (9月7日～9月13日)

今週のコメント
～感染予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ 増加」

第37週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は前週比7.6%増の832例であった。昨年同週比71.3%減 (2019年 第37週2,898例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.12、0.58、0.48、0.47、0.33であった。

感染性胃腸炎は前週比9%増の417例で、中河内3.88、大阪府南部2.83、中河内2.70、泉州2.45、北河内2.31である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は41%増の114例で、中河内および泉州0.90、大阪府南部0.83であった。

ヘルパンギーナは45%増の93例で、泉州1.40、堺市1.11、大阪府南部0.72である。

咽頭結膜熱は16%増の65例で、中河内0.80、泉州0.65、大阪府北部0.64であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(定点あたり報告数)
2020.1w～ 2019.1w～
登録レベル: 6 注: 登録レベル: 未設定

ヘルパンギーナ

(定点あたり報告数)
2020.1w～ 2019.1w～
登録レベル: 6 注: 登録レベル: 未設定

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第37週9月7日～9月13日)

第37週の順位	第36週の順位	感染症	2020年 第37週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第37週の 定点あたり 報告数	2020年第37週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.12	9%増	3.79	10-14歳_15%
2	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.58	41%増	1.90	4歳_16%
3	2	突発性発しん	0.48	19%減	0.38	1歳_69%
4	4	ヘルパンギーナ	0.47	45%増	1.04	1歳_47%
5	5	咽頭結膜熱	0.33	16%増	0.59	1歳_58%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.00	100%減	0.35	0%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第37週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒レベル (黄色) が点灯した。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。

表 2. 大阪府全数報告数 (2020年 第37週9月7日～9月13日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【週報】発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	4	1	1			1	1		103
4類感染症 レイノスラ症 (肺炎型)	1		1						74
5類感染症	後天性免疫不全症候群	2							2
	侵襲性肺炎球菌感染症	2			1			1	86
	梅毒	7	1				1	1	5
	百日咳	1						1	103
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	561							9,606
総括	新規登録患者数: 118名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 43名)							
(2020年7月分)		(府内累積報告数 834名、内 肺・喀痰塗抹陽性 304名)							

(2020年9月15日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、9月7日から9月13日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第38週 (9月14日～9月20日)

今週のコメント
～感染予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「咽頭結膜熱 減少」

第38週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は770例であり、前週比7.5%減であった。昨年同週比69.2%減 (2019年 第38週2,499例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.92、0.58、0.46、0.43、0.24であった。

感染性胃腸炎は前週比9%減の378例で、中河内3.10、泉州2.85、大阪府南部2.61、南河内2.31、北河内1.85である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%増の115例で、中河内1.50、北河内0.85、大阪府南部0.72であった。

ヘルパンギーナは2%減の91例で、大阪府南部1.22、堺市0.89、泉州0.80である。

咽頭結膜熱は26%減の48例で、大阪府南部0.44、泉州0.40、北河内0.35である。

咽頭結膜熱

(定点あたり報告数)
2020.1w～ 2019.1w～
登録レベル: 3 注: 登録レベル: 未設定

感染性胃腸炎

(定点あたり報告数)
2020.1w～ 2019.1w～
登録レベル: 20 注: 登録レベル: 未設定

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第38週9月14日～9月20日)

第38週の順位	第37週の順位	感染症	2020年 第38週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第38週の 定点あたり 報告数	2020年第38週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.92	9%減	3.50	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.58	1%増	1.43	5歳_17%
3	4	ヘルパンギーナ	0.46	2%減	0.67	1歳_41%
4	3	突発性発しん	0.43	10%減	0.37	1歳_51%
5	5	咽頭結膜熱	0.24	26%減	0.32	1歳_50%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.01	-	0.38	20歳以上_100%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第38週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒レベル (黄色) が点灯した。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。

表 2. 大阪府全数報告数 (2020年 第38週9月14日～9月20日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【週報】発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	4		2				1	1	108
4類感染症 レイノスラ症 (肺炎型)	2		1						76
5類感染症	アムニオニオシス	1							1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	1	1	1				101
	新変種溶血性レンサ球菌感染症	1				1			35
	後天性免疫不全症候群	2						1	70
	梅毒	5	1						4
百日咳	1				1				104
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	456							10,062
総括	新規登録患者数: 118名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 43名)							
(2020年7月分)		(府内累積報告数 834名、内 肺・喀痰塗抹陽性 304名)							

(2020年9月23日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、9月14日から9月20日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第39週 (9月21日～9月27日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 減少」

第39週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は621例であり、前週比19.4%減であった。昨年同週比71.9%減 (2019年 第39週2,207例) と少ない状況である。第39週の報告の解釈については、連休による医療機関の診療日数と受診者の減少を考慮する必要がある。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.61、0.37、0.34、0.31、0.22であった。

感染性胃腸炎は前週比16%減の316例で、大阪府南部3.44、中河内2.00、南河内1.94、大阪市西部1.80、北河内1.77である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は37%減の73例で、中河内0.58、三島・堺市0.53であった。

ヘルパンギーナは33%減の61例で、大阪府南部1.44、泉州0.55、南河内0.38である。大阪府南部は2週連続で1を超えている。

咽頭結膜熱は8%減の44例で、中河内0.58、三島0.41、堺市0.26であった。

感染性胃腸炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第39週 の順位	第38週 の順位	感染症	2020年 第39週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第39週の 定点あたり 報告数	2020年第39週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.61	16%減	2.86	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.37	37%減	1.44	3歳_15%
3	4	突発性発しん	0.34	21%減	0.31	1歳_61%
4	3	ヘルパンギーナ	0.31	33%減	0.57	1歳_33%
5	5	咽頭結膜熱	0.22	8%減	0.29	1歳_48%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.00	-	0.30	-

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第39週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定「検査感染症」と指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪府のモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒信号 (黄色) が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密 (密閉、密集、密接) の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期検出、封じ込めが重要である。

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。

緊急事態宣言(4/7-5/21) 警戒信号(7/12-)

*詳細はリンク先の情報をご覧ください。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

疾患名 () 内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3類感染症 細菌性出血性大腸菌感染症	3		1				1	1	113
4類感染症 レジオネラ症 (ノンタイプ型)	1				1				77
5類感染症 カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1							1	107
梅毒	3			1					2,661
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	387								10,449
結核 (2020年7月分)	結核 新登録患者数: 118名								(内 肺-喀痰塗抹陽性 43名)
									(府内累積報告数 834名、内 肺-喀痰塗抹陽性 304名)

(2020年9月29日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、9月21日から9月27日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第40週 (9月28日～10月4日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「ヘルパンギーナ 増加」

第40週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は697例であり、前週比12.2%増であった。(ただし、前週の報告の解釈については、連休による医療機関の診療日数と受診者の減少を考慮する必要がある)。昨年同週比69.3%減 (2019年 第40週2,274例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.76、0.48、0.45、0.40、0.21であった。

感染性胃腸炎は前週比9%増の343例で、南河内2.81、大阪府南部2.59、中河内2.32、泉州2.25、大阪市北部2.00である。

ヘルパンギーナは54%増の94例で、大阪府南部1.06、南河内1.00、泉州0.75であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は21%増の88例で、大阪府北部0.86、北河内0.81、大阪府南部0.76である。

咽頭結膜熱は9%減の40例で、大阪府北部0.36、大阪府東部0.33、北河内0.31であった。

ヘルパンギーナ

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第40週 の順位	第39週 の順位	感染症	2020年 第40週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第40週の 定点あたり 報告数	2020年第40週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.76	9%増	3.27	10-14歳_14%
2	4	ヘルパンギーナ	0.48	54%増	0.45	2歳_34%
3	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.45	21%増	1.47	10-14歳_15%
4	3	突発性発しん	0.40	16%増	0.41	1歳_44%
5	5	咽頭結膜熱	0.21	9%減	0.35	1歳_45%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.02	-	0.31	1歳-2歳_40%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第40週のコメント

～日本紅斑熱～ 大阪府では、2020年は40週までに8例の報告があり、過去4年間同時期と比較して多い

全数把握感染症

日本紅斑熱

日本紅斑熱は、紅斑熱群リキチアの一つ Rickettsia japonica を起因病原体とし、野山でマダニに刺咬されることにより感染する。媒介マダニの活動が活発化する4月～10月に発生し、特に9月、10月が多い。自然界で保菌している感染動物として、げっ歯類、野生のシカ、イノシシなどがあげられる。

潜伏期は2～8日であり、頭痛、発熱、倦怠感を伴って発症する。発熱、発しん、刺し口が主要な徴候であるが、必ずしも、刺し口があるとは限らない。発しんは、体幹部より四肢末端部に強出現し、検査所見では、肝臓酵素の上昇、血小板の減少が認められる。治療には、抗菌薬投与が効果的であり、第一選択薬はテトラサイクリン系の抗菌薬である。また、ニューキノロン系抗菌薬が有効であるとの報告もある。β-ラクタム系の抗菌薬は全く無効である。

*詳細はリンク先の情報をご覧ください。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[日本紅斑熱](#)

疾患名 () 内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3類感染症 細菌性出血性大腸菌感染症	2				1			1	113
4類感染症 日本紅斑熱	1				1				8
4類感染症 レジオネラ症 (肺炎型)	1							1	79
5類感染症 カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	4						3	1	111
後天性免疫不全症候群	1							1	77
破傷風	1							1	87
水痘 (入院例)	1		1						9
梅毒	6	1					1	4	680
パロマイコプラズマ耐性腸球菌感染症	1				1				16
風しん	1	1							7
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	362								10,811
結核 (2020年8月分)	結核 新登録患者数: 112名								(内 肺-喀痰塗抹陽性 40名)
									(府内累積報告数 976名、内 肺-喀痰塗抹陽性 355名)

(2020年10月6日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、9月28日から10月4日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報（速報） 2020年 第41週（10月5日～10月11日）

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 例年同時期に比べ少ない」

第41週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は667例であり、前週比4.3%減であった。昨年同週比71.4%減（2019年 第41週2,333例）と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、ヘルパンギーナ、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ11.78、0.45、0.42、0.38、0.17であった。

感染性胃腸炎は前週比2%増の349例で、南河内2.88、泉州2.60、中河内2.50、大阪府南部2.06、三島1.76である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%増の89例で、中河内0.95、泉州0.70、大阪府南部0.59であった。

ヘルパンギーナは20%減の75例で、南河内1.38、大阪府南部0.59、泉州0.55である。

流行性角結膜炎は80%増の9例で、大阪府北部0.80、北河内0.33、大阪府南部0.25であった。

インフルエンザは40%減の3例で、定点あたり報告数は0.01であった。昨年同週比95%減（2019年 第41週65例）と少ない状況である。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2020年 第41週10月5日～10月11日）

第41週 の順位	第40週 の順位	感染症	2020年 第41週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第41週の 定点あたり 報告数	2020年第41週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.78	2%増	3.37	10-14歳_15%
2	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.45	1%増	1.81	5歳_16%
3	4	突発性発しん	0.42	5%増	0.36	1歳_51%
4	2	ヘルパンギーナ	0.38	20%減	0.47	1歳_37%
5	6	流行性角結膜炎	0.17	80%増	0.19	20歳以上_67%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.01	40%減	0.22	20歳以上_100%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第41週のコメント

～ウイルス性肝炎～ 大阪府では、毎年、15-25例の報告があります。2020年は第41週までに18例の報告がありました

全数把握感染症

ウイルス性肝炎（A型肝炎及びE型肝炎を除く）

ウイルス性肝炎は、ウイルス感染を原因とする急性肝炎（B型肝炎、C型肝炎、その他のウイルス性肝炎）である。慢性肝炎、無症候性キャリア及びこれらの急性増悪例は含まない。全身倦怠感、感冒様症状、食欲不振、悪寒、嘔吐などの症状を自覚し、数日後に褐色尿や黄疸を伴うことが多い。発病直後は、けずあるいは急性胃腸炎などと類似した症状を示す。潜伏期間は、B型肝炎では約3か月間、C型肝炎では2週間から6か月間である。病型は、黄疸を伴う急性肝炎、顕性黄疸を示さない無黄疸性肝炎、高度の黄疸を呈する胆汁うっ滞性肝炎、急性肝不全症状を呈する劇症肝炎、に分類される。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)

ウイルス性肝炎

表2. 大阪府全数報告数（2020年 第41週10月5日～10月11日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査＞全数報告をご覧ください。）

病名	報告数	豊 能	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4		1			1	1	119
4 類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	3	1					1	82
5 類感染症	ウイルス性肝炎（B型）	1		1					18
	ウイルス性肝炎（その他）	1			1				
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	1	1	1				114
	後天性免疫不全症候群	2						2	81
	梅毒	4	1		1			2	699
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	345							11,156
結核	結核 新登録患者数：112名								(内 肺-喀痰塗抹陽性 40名)
(2020年8月分)									(府内累積報告数 976名、内 肺-喀痰塗抹陽性 355名)

(2020年10月13日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、10月5日から10月11日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報（速報） 2020年 第42週（10月12日～10月18日）

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「ヘルパンギーナ 増加」

第42週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は716例であり、前週比7.3%増であった。昨年同週比60.5%減（2019年 第42週1,814例）と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.80、0.51、0.48、0.37、0.17である。

感染性胃腸炎は前週比1%増の352例で、中河内3.10、南河内2.94、大阪府北部2.29、大阪府南部2.18、泉州1.95であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%増の99例で、中河内1.10、大阪府南部0.82、泉州0.75である。

ヘルパンギーナは25%増の94例で、南河内1.31、大阪府北部1.14、大阪府南部0.76であった。

咽頭結膜熱は13%増の34例で、大阪府東部0.40、大阪府南部・中河内0.35である。

流行性角結膜炎は増減なしの9例で、大阪府南部0.50、中河内・堺市0.40であった。

インフルエンザは1例減の2例で、定点あたり報告数は0.01であった。昨年同週比97.1%減（2019年 第42週 70例）と少ない状況である。

ヘルパンギーナ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2020年 第42週10月12日～10月18日）

第42週 の順位	第41週 の順位	感染症	2020年 第42週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第42週の 定点あたり 報告数	2020年第42週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.80	1%増	3.05	10-14歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.51	11%増	1.52	4歳_17%
3	4	ヘルパンギーナ	0.48	25%増	0.17	1歳_35%
4	3	突発性発しん	0.37	11%減	0.36	1歳_52%
5	6	咽頭結膜熱	0.17	13%増	0.33	1歳_50%
5	5	流行性角結膜炎	0.17	増減なし	0.29	20歳以上_100%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.01	33%減	0.23	1歳、20歳以上_50%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第42週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食内・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ヘモリシンを産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染された食料を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起すことがある。3-5日の潜伏期を経て、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)

腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数（2020年 第42週10月12日～10月18日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査＞全数報告をご覧ください。）

病名	報告数	豊 能	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	10		1	1	1			7 130
4 類感染症	日本紅斑熱	2						2	10
	レジオネラ症（肺炎型）	3				1			85
5 類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	4					2	2	119
	後天性免疫不全症候群	5						1	4 87
	細菌性肺炎球菌感染症	1							1 89
	梅毒	12			1	1	1	2	7 722
	播種性クリプトコックス症	1					1		4
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	360							11,516
結核	結核 新登録患者数：112名								(内 肺-喀痰塗抹陽性 40名)
(2020年9月分)									(府内累積報告数 976名、内 肺-喀痰塗抹陽性 355名)

(2020年10月20日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、10月12日から10月18日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第43週 (10月19日～10月25日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第43週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は750例であり、前週比4.7%増であった。昨年同週比57.0%減 (2019年 第43週1,744例) と少ない状況である。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.89、0.58、0.49、0.44、0.19である。

感染性胃腸炎は前週比5%増の371例で、泉州2.90、大阪府南部2.88、南河内2.50、中河内2.40、北河内2.12であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比15%増の114例で、大阪府南部1.00、中河内0.85、北河内0.81である。ヘルパンギーナは前週比3%増の97例で、大阪府南部1.12、南河内1.06、堺市0.79であった。

咽頭結膜熱は前週比12%増の38例で、大阪府南部0.53、大阪府東部0.33、大阪府北部0.29である。

インフルエンザは1例減の2例であり、昨年同週比98.7%減 (2019年 第43週 77例) と少ない状況である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第43週10月19日～10月25日)

第43週 の順位	第42週 の順位	感染症	2020年 第43週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第43週の 定点あたり 報告数	2020年第43週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.89	5%増	2.95	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.58	15%増	1.43	4歳_19%
3	3	ヘルパンギーナ	0.49	3%増	0.19	2歳_37%
4	4	突発性発しん	0.44	19%増	0.32	1歳_57%
5	5	咽頭結膜熱	0.19	12%増	0.37	1歳_55%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.00	50%減	0.26	20歳以上_100%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第43週のコメント

～ 破傷風 ～ 大阪府では、年間10名未満の報告があります

全数把握感染症

破傷風

破傷風は、破傷風菌 (*Clostridium tetani*) が産生する毒素のひとつである破傷風毒素により強直性痙攣を引き起こす感染症である。破傷風菌は芽胞の形で土壌中に広く常在し、創傷部位から体内に侵入する。侵入した芽胞は感染部位で発芽・増殖して破傷風毒素を産生する。破傷風の特徴的な症状である強直性痙攣は、破傷風毒素が主な原因であり、潜伏期間 (3～21日) の後に局所 (痙攣、開口障害、嚥下困難など) から始まり、全身 (呼吸困難や後弓反張など) に移行し、重篤な患者では呼吸筋の麻痺により窒息死することがある。発病初期に、抗破傷風人免疫グロブリンの投与が効果的である。破傷風の予防には、ワクチン接種が有効である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[破傷風とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第43週10月19日～10月25日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	4			1				3	134
4 類感染症 レジオネラ症 (肺炎型)	3					1		2	88
5 類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2						2	122
	梅毒	11		1	1	2		7	735
	破傷風	1			1				1
	薬剤耐性アシネバクター感染症	1						1	2
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	532								12,048
結核	結核 新登録患者数: 112名 (内 肺・喉炎連抹陽性 40名)								
(2020年8月分)	(府内累積報告数 976名、内 肺・喉炎連抹陽性 355名)								

(2020年10月27日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、10月19日から10月25日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第44週 (10月26日～11月1日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「ヘルパンギーナ 減少」

第44週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は687例であり、前週比8.4%減であった。昨年同週比64.4%減 (2019年 第44週1,931例) と少ない状況である。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発しん、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ1.81、0.56、0.36、0.36、0.20である。

感染性胃腸炎は前週比5%減の354例で、泉州2.70、大阪府南部2.65、中河内2.50、北河内2.08、大阪府西部1.90であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%減の109例で、中河内1.25、南河内・泉州0.75、大阪府北部0.64である。ヘルパンギーナは27%減の71例で、大阪府南部1.53、南河内1.00、三島0.35であった。

咽頭結膜熱は前週比3%増の39例で、大阪府南部0.65、泉州0.40、堺市0.32である。

インフルエンザは1例増の2例であり、昨年同週比98.1%減 (2019年 第44週 106例) と少ない状況である。

ヘルパンギーナ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2020年 第44週10月26日～11月1日)

第44週 の順位	第43週 の順位	感染症	2020年 第44週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第44週の 定点あたり 報告数	2020年第44週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.81	5%減	3.59	10-14歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.56	4%減	2.01	4歳_17%
3	3	ヘルパンギーナ	0.36	27%減	0.18	1歳_37%
4	4	突発性発しん	0.36	18%減	0.31	1歳_55%
5	5	咽頭結膜熱	0.20	3%増	0.34	1歳_56%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.01	100%増	0.35	8歳_20歳以上_50%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第44週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、2019年12月、中華人民共和湖北武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態として、3月11日に「世界的な大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒信号 (黄色) が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第44週10月26日～11月1日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	1	1							136
4 類感染症	E型肝炎	1						1	4
	慢性溶血性レンサ球菌感染症	2			1		1		92
5 類感染症	後天性免疫不全症候群	2						1	40
	慢性肺炎球菌感染症	4		1			1	2	92
	水痘 (入腺例)	1			1				10
	梅毒	5						4	759
	百日咳	1						1	105
指定感染症 新型コロナウイルス感染症	830								12,878
結核	結核 新登録患者数: 122名 (内 肺・喉炎連抹陽性 54名)								
(2020年9月分)	(府内累積報告数 1,101名、内 肺・喉炎連抹陽性 416名)								

(2020年11月3日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、10月26日から11月1日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第45週 (11月2日～11月8日)

今週のコメント
～感染症予防の基本～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第45週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は696例であり、前週比1.3%増であった。昨年同週比60.9%減 (2019年 第45週1,780例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、突発性発疹、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.86、0.60、0.36、0.31、0.18であった。

感染性胃腸炎は前週比3%増の364例で、中河内3.15、南河内2.69、北河内2.23、大阪府西部2.20、大阪府南部2.12である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比8%増の119例で、大阪府南部1.29、泉州1.00、中河内0.70であった。ヘルパンギーナは増減なしの71例で、大阪府南部0.82、南河内0.75、大阪府西部0.70である。

咽頭結膜熱は前週比10%減の35例で、泉州0.35、中河内0.30、南河内0.25である。

インフルエンザは6例増の8例であり、昨年同週比94.2%減 (2019年 第45週 139例) と少ない状況である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

感染性胃腸炎

第45週 の順位	第44週 の順位	感染症	2020年 第45週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第45週の 定点あたり 報告数	2020年第45週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.86	3%増	3.64	20歳以上_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.60	8%増	1.81	20歳以上_15%
3	3	ヘルパンギーナ	0.36	増減なし	0.18	1歳_39%
4	3	突発性発疹	0.31	15%減	0.31	1歳_50%
5	5	咽頭結膜熱	0.18	10%減	0.34	1歳_40%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.03	300%増	0.46	20歳以上_38%

突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第45週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行 (パンデミック) を宣言した。日本では、2月1日に指定・検査感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪エドルのエンタング指標を踏まえ、7月12日、警戒番号 (黄色) が付された。これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防止には、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
新型コロナウイルスに関するQ&A(厚生労働省)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症	1								1	137
4 類感染症	2								2	91
5 類感染症	1								1	41
	1								1	125
	1								1	94
	1								1	24
	3	1						1	1	95
指定感染症	940	1						1	3	773
総計	942	1						1	3	13,814

総括 新規患者数: 122名 (内 那・喀痰塗抹陽性 54名)
(2020年9月分) (府内累積報告数 1,101名、内 那・喀痰塗抹陽性 416名)
(2020年11月10日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、11月2日から11月8日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第46週 (11月9日～11月15日)

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「水痘 増加」

第46週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は752例であり、前週比8.0%増であった。昨年同週比65.7%減 (2019年 第46週2,190例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発疹、ヘルパンギーナ、水痘、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.98、0.54、0.39、0.30、0.23であった。

感染性胃腸炎は前週比7%増の388例で、中河内3.70、南河内2.69、大阪府南部2.53、泉州2.15、三島2.06である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比10%減の106例で、中河内1.15、北河内0.92、大阪府南部0.71であった。ヘルパンギーナは前週比17%減の59例で、南河内1.56、三島0.35、中河内0.30である。

水痘は前週比44%増の46例で、三島0.53、大阪府北部0.43、北河内0.38であった。

咽頭結膜熱は前週比29%増の45例で、北河内0.42、泉州0.35、大阪府西部0.33であった。

インフルエンザは6例減の2例であり、昨年同週比99.2%減 (2019年 第46週 254例) と少ない状況である。

水痘

感染性胃腸炎

第46週 の順位	第45週 の順位	感染症	2020年 第46週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第46週の 定点あたり 報告数	2020年第46週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.98	7%増	5.25	10-14歳_18%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.54	10%減	2.54	5歳_15%
3	4	突発性発疹	0.39	28%増	0.38	1歳_48%
4	3	ヘルパンギーナ	0.30	17%減	0.11	1歳_37%
5	6	水痘	0.23	44%増	0.47	5歳_17%
5	5	咽頭結膜熱	0.23	29%増	0.38	1歳_64%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.01	75%減	0.84	10-14歳_20歳以上_50%

突発性発疹については、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第46週のコメント

～バンコマイシン耐性腸球菌感染症～ 2019年の報告数は、大阪府が全国で第一位である

全数把握感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) は、バンコマイシンに耐性を獲得した腸球菌である。術後患者や感染防御機能の低下した患者では腹膜炎、術創感染症、肺炎、敗血症などの感染症を引き起こす場合があるため、集中治療室や外科治療ユニットなどで患者を治療する部門で問題となっており、臨床的、疫学的に重要な薬剤耐性菌である。VREによる術創感染症や腹膜炎などの治療は、抗生薬の投与とともに感染巣の洗浄やドレナージなどを適宜組み合わせる。

左: 大阪府 右: 全国
(2016-2019年) 年間報告数
(2020年) 大阪府 第46週までの累計
全国 第45週までの累計

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
バンコマイシン耐性腸球菌感染症(国立感染症研究所)

疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
4 類感染症	1			1						92
5 類感染症	1								1	20
	2			1		1				128
	8	2	1							792
	1								1	19
指定感染症	1,605									15,421

総括 新規患者数: 122名 (内 那・喀痰塗抹陽性 54名)
(2020年9月分) (府内累積報告数 1,101名、内 那・喀痰塗抹陽性 416名)
(2020年11月17日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の集計は、11月9日から11月15日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第47週 (11月16日～11月22日)

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第47週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は833例であり、前週比10.8%増であった。昨年同週比62.1%減 (2019年 第47週2,197例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、ヘルパンギーナ、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ12.26、0.66、0.40、0.28、0.26であった。

感染性胃腸炎は前週比14%増の443例で、大阪市内3.60、南河内3.19、泉州3.10、北河内3.00、中河内2.90である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比22%増の129例で、中河内1.90、泉州0.90、南河内0.88であった。

ヘルパンギーナは前週比8%減の54例で、南河内1.13、北河内0.50、大阪市内0.33である。

水痘は前週比11%増の51例で、泉州0.75、大阪市内0.43、堺市0.37であった。

インフルエンザは2例増の4例であり、昨年同週比98.9%減 (2019年 第47週 363例) と少ない状況である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

感染性胃腸炎

第47週 の順位	第46週 の順位	感染症	2020年 第47週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第47週の 定点あたり 報告数	2020年第47週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.26	14%増	5.49	10-14歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.66	22%増	2.50	4歳_18%
3	3	突発性発しん	0.40	1%増	0.33	1歳_44%
4	4	ヘルパンギーナ	0.28	8%減	0.10	1歳_39%
5	5	水痘	0.26	11%増	0.46	6歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.01	100%増	1.21	20歳以上_50%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第47週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的な大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒信号 (黄色) が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

緊急事態宣言 (4/7-5/21) 警戒信号 (7/12～)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

3類感染症	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積
5類感染症	1					1			1	140
5類感染症	1								1	129
5類感染症	1				1				1	17
5類感染症	1			1					1	96
5類感染症	1								1	97
5類感染症	3	1						1	1	803
指定感染症	2,226									17,647
結果 (2020年9月分)	総数 新登録患者数: 122名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 54名)								
		(府内累積報告数 1,101名、内 肺・喀痰塗抹陽性 416名)								

新型コロナウイルス感染症の集計は、11月16日から11月22日の大阪府の報道発表の報告数を示しています。
[詳細はリンク先の情報をご覧ください。](#)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第48週 (11月23日～11月29日)

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 減少」

第48週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は795例であり、前週比4.6%減であった。昨年同週比69.5%減 (2019年 第48週2,609例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、咽頭結核熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ12.28、0.54、0.34、0.27、0.22であった。

感染性胃腸炎は前週比1%増の446例で、南河内3.81、中河内3.50、大阪市内2.94、北河内2.62、泉州2.50である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比18%減の106例で、中河内1.10、泉州0.75、北河内0.65であった。

水痘は前週比2%増の52例で、北河内0.65、中河内0.55、大阪市内0.40であった。

咽頭結核熱は前週比12%減の43例で、大阪市内0.60、泉州、北河内0.35であった。

インフルエンザは2例増の6例であり、昨年同週比99.0%減 (2019年 第48週 598例) と少ない状況である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

感染性胃腸炎

第48週 の順位	第47週 の順位	感染症	2020年 第48週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第48週の 定点あたり 報告数	2020年第48週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.28	1%増	6.83	1歳_19%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.54	18%減	3.00	5歳_20%
3	3	突発性発しん	0.34	14%減	0.40	1歳_51%
4	5	水痘	0.27	2%増	0.61	5歳_21%
5	6	咽頭結核熱	0.22	12%減	0.48	1歳_60%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.02	50%増	1.99	9歳_33%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第48週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗いや咳エチケットなど) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的な大流行 (パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

6月中旬以降、報告数が増加し、大阪モデルのモニタリング指標を超えたため、7月12日、警戒信号 (黄色) が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

緊急事態宣言 (4/7-5/21) 警戒信号 (7/12～)

※グラフは大阪府の報道発表の報告数をもとに作成しています。□

4類感染症	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積
4類感染症	1								1	5
5類感染症	1						1		1	44
5類感染症	1								1	136
5類感染症	1					1			1	99
5類感染症	5	1						1	1	825
指定感染症	2,362									20,011
結果 (2020年9月分)	総数 新登録患者数: 120名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 36名)								
		(府内累積報告数 1,222名、内 肺・喀痰塗抹陽性 453名)								

新型コロナウイルス感染症の集計は、大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の (11月1日) と (11月2日) の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報（速報） 2020年 第49週（11月30日～12月6日）

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、3密の回避が重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第49週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は844例であり、前週比6.2%増であった。昨年同週比68.9%減（2019年 第49週2,714例）と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘、突発性発疹、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ12.24、0.72、0.38、0.33、0.25であった。

感染性胃腸炎は前週比2%増の439例で、中河内3.75、北河内3.23、大阪市南部2.53、南河内2.50、泉州2.45である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比34%増の142例で、中河内1.45、北河内1.15、南河内・泉州共に0.75であった。

水痘は前週比33%増の69例で、泉州0.75、南河内0.69、大阪市南部0.35である。

咽頭結膜熱は前週比14%増の49例で、大阪市北部0.64、大阪市東部0.53、三島0.47であった。

インフルエンザは5例減の11例であり、昨年同週比99.1%減（2019年 第49週1,165例）と少ない状況である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

水痘

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2020年 第49週11月30日～12月6日）

第49週 の順位	第48週 の順位	感染症	2020年 第49週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第49週の 定点あたり 報告数	2020年第49週の 年齢別 患者発生数 最大前割合
1	1	感染性胃腸炎	2.24	2%減	7.24	20歳以上_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.72	34%増	3.19	5歳_13%
3	4	水痘	0.35	33%増	0.43	7歳_16%
4	3	突発性発疹	0.33	4%減	0.31	1歳_55%
5	5	咽頭結膜熱	0.25	14%増	0.66	1歳_43%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.04	83%増	3.87	1歳_27%

突発性発疹については、(1)季節変動はなく、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異はほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第49週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防（手洗い、マスク着用、3密の回避）の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関（WHO）は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行（パンデミック）」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

11月以降、報告数、および、重症病床使用率が増加し、12月4日、**非常事態（赤色）**が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日（通常5～6日）であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

表2. 大阪府全数報告数（2020年 第49週11月30日～12月6日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【速報】発生動向調査＞全数報告をご覧ください。）

疾患名 ()内の疾患は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1	1							142
4類感染症	A型肝炎	1							1	7
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1					1			140
	後天性免疫不全症候群	2							2	102
	優養性肺炎球菌感染症	2	1	1						107
	梅毒	6	1		1	1	1		3	839
	パノマイシン耐性腸球菌感染症	1							1	19
百日咳	1							1	110	
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	2,496								22,505
結核 (2020年10月分)	結核 新登録患者数：120名	(内・喀痰塗抹陽性 36名)								
		(府内累積報告数 1,222名、内・喀痰塗抹陽性 453名)								

(2020年12月8日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の報告数は、大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の（11月1日まで）と（11月2日以降）の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報（速報） 2020年 第50週（12月7日～12月13日）

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、3密の回避が重要

定点把握感染症

「水痘 減少」

第50週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は829例であり、前週比1.8%減であった。昨年同週比70.8%減（2019年 第50週2,837例）と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発疹、水痘、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ11.28、0.72、0.38、0.31、0.25であった。

感染性胃腸炎は前週比2%増の446例で、中河内3.25、南河内3.00、大阪市南部2.88、北河内2.77、大阪市北部2.71である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比1%減の141例で、南河内1.31、中河内1.20、泉州1.00であった。

水痘は前週比12%減の61例で、中河内0.55、北河内0.54、泉州0.50である。

咽頭結膜熱は前週と変わらず49例で、泉州0.50、三島0.41、中河内0.35であった。

インフルエンザは8例減の3例であり、昨年同週比99.9%減（2019年 第50週2,500例）と少ない状況である。

水痘

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

感染性胃腸炎

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2020年 第50週12月7日～12月13日）

第50週 の順位	第49週 の順位	感染症	2020年 第50週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第50週の 定点あたり 報告数	2020年第50週の 年齢別 患者発生数 最大前割合
1	1	感染性胃腸炎	2.28	2%増	7.70	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.72	1%減	3.51	4歳_13%
3	4	突発性発疹	0.38	16%増	0.32	1歳_49%
4	3	水痘	0.31	12%減	0.46	3歳_16%
5	5	咽頭結膜熱	0.25	増減なし	0.61	1歳_37%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.01	73%減	8.31	20歳以上_100%

突発性発疹については、(1)季節変動はなく、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異はほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第50週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防（手洗い、マスク着用、3密の回避）の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関（WHO）は、2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」、3月11日に「世界的大流行（パンデミック）」を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

11月以降、報告数、および、重症病床使用率が増加し、12月4日、**非常事態（赤色）**が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日（通常5～6日）であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

（定点あたり報告数）
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年
2020.26w～ 2019.26w～
2020年 2019年

表2. 大阪府全数報告数（2020年 第50週12月7日～12月13日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【速報】発生動向調査＞全数報告をご覧ください。）

疾患名 ()内の疾患は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
4類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2					1	1	1	94
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2						1	1	145
	後天性免疫不全症候群	1							1	103
	優養性肺炎球菌感染症	2						1	1	109
	梅毒	6	1		1				4	854
指定感染症	新型コロナウイルス感染症	2,422								24,927
結核 (2020年10月分)	結核 新登録患者数：120名	(内・喀痰塗抹陽性 36名)								
		(府内累積報告数 1,222名、内・喀痰塗抹陽性 453名)								

(2020年12月15日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の報告数は、大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の（11月1日まで）と（11月2日以降）の情報をご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第51週 (12月14日～12月20日)

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、3密の回避が重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 減少」

第51週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は806例であり、前週比2.8%減であった。昨年同週比73.3%減 (2019年 第51週3,020例) と少ない状況である。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、咽頭結膜熱、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ12.38、0.61、0.32、0.30、0.23であった。

感染性胃腸炎は前週比5%増の467例で、北河内4.04、大阪市南部3.41、中河内3.00、三島2.18、泉州2.15である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比15%減の120例で、中河内1.15、大阪市南部0.94、大阪市北部0.93である。

咽頭結膜熱は前週比18%増の58例で、泉州0.40、大阪市北部0.36、豊能0.32である。

水痘は前週比2.6%減の45例で、泉州0.55、北河内・南河内0.38であった。

インフルエンザは8例増の11例で、昨年同週比99.7%減 (2019年 第51週 4,120例) と少ない状況である。

第51週 の順位	第50週 の順位	感染症	2020年 第51週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第51週の 定点あたり 報告数	2020年第51週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.38	5%増	8.51	20歳以上_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.61	15%減	3.47	4歳_13%
3	3	突発性発しん	0.32	16%減	0.29	1歳_55%
4	5	咽頭結膜熱	0.30	18%増	0.57	1歳_36%
5	4	水痘	0.23	26%減	0.51	4歳_6歳_10-14歳_16%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.04	267%増	13.69	20歳以上_36%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第51週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防 (手洗い、マスク着用、3密の回避) の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態、3月11日に世界的大流行 (パンデミック) を宣言した。日本では、2月1日に指定・検疫感染症に指定された。

11月以降、報告数、および、重症病状使用率が増加し、12月4日、非常事態 (赤色) が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的特徴として、潜伏期間は1～14日 (通常5～6日) であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が1週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。

感染拡大を防ぐには、手洗い、咳エチケット、3密(密閉、密集、密接)の回避など「新しい生活様式」の実践、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第51週12月14日～12月20日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症発生動向調査センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
4 類感染症									
レジオネラ症 (肺炎型)	2	1	1						96
ウイルス性肝炎	1								1 22
5 類感染症									
カルバペム耐性菌内臓器科細菌感染症	2	1		1					149
後天性免疫不全症候群	2		1						1 106
硬膜性インフルエンザ菌感染症	1						1		25
梅毒	4						1	1	2 874
指定感染症									
新型コロナウイルス感染症	2108								27,037
結核									
結核 新登録患者数: 120名									(内 肺・喉頭塗抹陽性 36名)
(2020年11月分)									(府内累積報告数 1,222名、内 肺・喉頭塗抹陽性 453名)

新型コロナウイルス感染症の報告数は、大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の11月1日まで比11月2日以降までご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第52週 (12月21日～12月27日)

今週のコメント
～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、3密の回避が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 増加」

第52週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は846例であり、前週比5.0%増であった。前年同週比は70.4%減 (2019年 第52週2,857例) であった。

定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、突発性発しん、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ12.76、0.60、0.26、0.26、0.19である。

感染性胃腸炎は前週比16%増の541例で、北河内5.12、南河内4.06、泉州3.40、大阪市南部3.29、中河内2.90であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の118例で、大阪市東部0.93、北河内0.88、中河内・泉州0.80である。

咽頭結膜熱は14%減の50例で、大阪市北部0.50、泉州0.45、中河内0.40であった。

水痘は18%減の37例で、堺市0.37、大阪市東部0.27、大阪市南部0.24である。

インフルエンザは9%減の10例で、定点あたり報告数は0.03であり、昨年同週比99.8%減 (2019年 第52週 5,317例) と少ない状況である。

第52週 の順位	第51週 の順位	感染症	2020年 第52週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2019年 第52週の 定点あたり 報告数	2020年第52週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.76	16%増	8.09	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.60	2%減	3.02	4歳_19%
3	4	咽頭結膜熱	0.26	14%減	0.69	1歳_32%
3	3	突発性発しん	0.26	19%減	0.40	1歳未満_1歳_40%
5	5	水痘	0.19	18%減	0.49	1歳未満_1歳_15-19歳_20%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	0.03	9%減	17.72	1歳未満_1歳_15-19歳_20%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第52週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2020年の梅毒報告数は、2018年、2019年を下回っている

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にあったが、2019年は2018年より下回った。大阪府における2020年の報告数は、3年ぶりに、1,000例を下回ることが見込まれる。

梅毒は、性行為・オラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児に胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗感染薬の投与で治療が可能である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

感染症発生動向調査センターは「新しい生活様式」の推進、感染者の早期探知、封じ込めが重要である。

表2. 大阪府全数報告数 (2020年 第52週12月21日～12月27日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症発生動向調査センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3 類感染症									
菌血症性大腸菌感染症	1					1			144
4 類感染症									
レジオネラ症 (肺炎型)	2	1				1			99
アメーバ赤痢 (腸管型)	1						1		48
ウイルス性肝炎	1					1			23
5 類感染症									
創傷型溶血性レンサ球菌感染症	2						1	1	48
後天性免疫不全症候群	1								1 109
硬膜性肺炎球菌感染症	4			1		2			1 113
梅毒	8	2	1	1	1	1		3	886
パルモマイシシ菌性肺球菌感染症	1								21
指定感染症									
新型コロナウイルス感染症	1,898								28,927
結核									
結核 新登録患者数: 92名									(内 肺・喉頭塗抹陽性 46名)
(2020年11月分)									(府内累積報告数 1,305名、内 肺・喉頭塗抹陽性 504名)

新型コロナウイルス感染症の報告数は、大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の11月1日まで比11月2日以降までご覧ください。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2020年 第53週 (12月28日～1月3日)
2021年 第1週 (1月4日～1月10日)

今週のコメント

～新しい生活様式の実践～ 手洗い、マスク着用、3密の回避が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 昨年同時期に比べ激減」

2020年第53週と2021年第1週をあわせて報告する。第53週は年末年始休暇による診療実日数の減少を考慮する必要がある。

第53週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は4330例であり、前週比60.1%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎であり、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ11.09、0.22、0.12、0.12、0.07であった。

2021年第1週の報告数の総計は622例であり、前週比88.5%増であった。前年同時期比では69.6%減(2020年第1週2,043例)であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎であり、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.93、0.38、0.28、0.21、0.21であった。

インフルエンザは2020年第53週が60%減の4例、定点あたり報告数は0.01であった。2021年第1週は125%増の9例で、定点あたり報告数は0.03であり、昨年同時期比99.8%減(2020年第1週、5,685例)と少ない状況である。

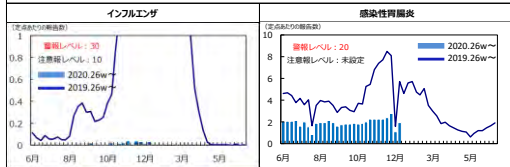


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2021年 第1週1月4日～1月10日)

第1週の順位	第53週の順位	感染症	2021年第1週の定点あたり報告数	前週比増減	2020年第1週の定点あたり報告数	2021年第1週の毎週別定点発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.93	77%増	1.60	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.38	74%増	0.41	5歳_10-14歳_20歳以上_12%
3	3	突発性発しん	0.28	129%増	0.06	1歳_55%
4	4	水痘	0.21	83%増	0.20	10-14歳_19%
4	5	咽頭結膜熱	0.21	215%増	0.06	1歳_44%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.03	125%増	11.16	20歳以上_33%

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。2020年第36週からインフルエンザの新シーズンの集計が始まりました。

第1週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～ 基本的な予防(手洗い、マスク着用、3密の回避)の徹底を

全数把握感染症

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)は、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認された。世界保健機関(WHO)は、2020年1月30日に国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態「3月11日に世界的大流行(パンデミック)」を宣言した。日本では、2月1日に指定-検疫感染症に指定された。

11月以降、報告数、および、重症病床使用率が増加し、12月4日、非常事態(赤色)が点灯した。

これまでの知見より、主な感染経路は飛沫・接触感染である。臨床的な特徴として、潜伏期間は1～14日(通常5～6日)であり、その後、発熱や呼吸器症状、全身倦怠感等の感冒様症状が週間前後持続することが多い。一部のものは、呼吸困難等の症状が現れ、肺炎を呈する。発病者の多くは軽症であるが、高齢者や基礎疾患等を有する者は重症化する可能性がある。感染拡大を防ぐには、手洗い、マスク着用、3密(密閉、密集、密接)の回避など新しい生活様式の実践、感染者の早期検出、封じ込めが重要である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク) [新型コロナウイルスに関するQ&A\(厚生労働省\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2021年 第1週1月4日～1月10日)

注: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「速報」発生動向調査>全数報告 をご覧ください)

病名	報告数	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉佐野	大阪府	府内累計
4 類感染症									
レジオネラ症 (ポニチアック熱型)	2							1	2
アズーラ菌症 (肺炎菌)	1	1							1
5 類感染症									
先天性免疫不全症候群	1		1						1
細菌性インフルエンザ菌感染症	1								1
細菌性肺炎球菌感染症	1								1
梅毒	2						1	1	2
パルモマイシシ菌性肺球菌感染症	1								1
指定感染症									
新型コロナウイルス感染症	3,680								34,452
総計									
(2020年11月分)	総計 新型コロナウイルス感染症: 92名								(内 肺炎球菌肺炎球菌性 46名)
									(府内累積報告数 1,305名、内 肺炎球菌肺炎球菌性 504名)

(2021年1月12日 集計分)

新型コロナウイルス感染症の報告数は、大阪府の報道発表の報告数を示しています。
詳細はリンク先の11月10日までと11月2日以降をご覧ください。

